
閻魔の日記

鳴峰東夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閻魔の日記

【Zコード】

Z5523E

【作者名】

鳴峰東夜

【あらすじ】

「ちくしょお……。青春かよ。青い春かよ。俺は黒い冬かよ」
恋愛ナシ、趣味ナシの『ただ』の高校生、俺は偶然ながらにも、ある事件に巻き込まれた。しかも、それは『人を超えた力』の衝突だった。
二つの組織、一つの野望、通い違う思い。
そのため犠牲になるものも、人それそれで、何が正しいかなんできつと、神様でも分からぬ
トルファンタジーここに！

第一章 出会いのページ

一章 「出会いのページ」

1

「……、はああ～ああ～～……」

恐ろしく重く、深く、暗いため息とともに半径1メートル程のどんよりオーラを放つた獄魔庵は、その場で校門を背に座り込んだ。そんなスーパー低テンション16歳、彼女いない歴=生きてきた時間の庵の前を、キヤツキヤツと騒ぐ制服姿のカップル、ハイな男子アンド女子が通り過ぎる。

「ちくしょお……、青春かよ～。青春かよ～。俺は黒い冬かよ～」なんてことを体育座りでうずくまりながら呟く庵の肩を、誰かが叩いた。庵が頭を上げると、そこには庵の通う高校、海晴高校の制服に身をつつみ、ブレザーはボタン全開、金髪、ピアスという一見不良少年を思わせる彼のクラスメイトがいた。

「ナード黒い呪文みたいなモン唱えてんだよつ。庵」

「うつせー海老村。^{えびむら}いいなーお前は性格も名前もユカイで」

「うなつ！ 海老村入鹿の何がユカイじゃッー？」

海老村は後ずさりしながら叫ぶ。

「もうエビとイルカの時点でユカイじや。お前、そのうち、名前に名字喰われつぞ」

「うなつ！ と頭が真っ白になる海老村を、やつぱ『イツはユカイだなつ』と庵は眺める。

この白毛から金色なエビイルカは、白毛から青色な庵を「色つき白毛仲間」ということで中学校の時からちよびくよくからんでくる。

2

庵の方にしても退屈しのぎになるので付き合つてやつてている。

本心から言うと嬉しかつた。庵には友達が少なく、そして母親がない。病氣で死んだそつだが庵が2歳の頃の話なので思い出が一切無い。そして父親、こつちは生きてはいるが、大して思い出は無い。庵の父親は研究者で、家にいても地下の研究室にこもつつきりだし、そして何より、

ちょくちょく行方不明になる。

しかも、帰つてくる時はへらへらと笑いながら、お土産などを持ち帰つてくる。

ちなみに最近のお土産はシンガポールの蛇酒だつた。（蛇エキス入りのビール）

確か、最初にキムチを持つて帰つてきた時は、飛び膝蹴りを顔面にお見舞いしてやつた。

そんなかんじで今日の庵が黒オーラなのも昨日バカが行方不明になつて、そのせいで警察にいろいろ夜中まで聞かれて疲れているからだ。

「……帰つてきたら腕ひしき十字固めとY-アームロックかけてやる……！」

しかも同じ手にだ！ と心の内に決意を固めていた庵の左側頭部を、通学用のカバンが直撃した。

ぐばああ！ と受け身の出来ない姿勢だった庵は、華麗に右に吹つ飛んだ。しかも海老村、不幸なやつめ。庵の右にいたので巻き込まれやがつたよ。

「だ、誰だ！？」

庵はがばつ、と起き上がり衝撃源へ目をやつた。

そこには海晴高校の制服を着た、赤ずんだ黒髪をツインテールにした少女が、右手でカバンをくるくると回して立つていた。

「庵。アンタねえ……、明日から『ゴールデンウイーク』なのよ！？ 何でそんな黒オーラを放出してるわけ？ 幼なじみとして見てられなかつたから活いれてやつたわ！」

ツインテールの少女は猛々しい態度で言つた。

「てめつ 瑠璃華……！ カバンは人を吹つ飛ばすモンじゃねーんだぞ……」

知らないわよ、と言つ瑠璃華を無視して庵は海老村の方を見た。

「……え、びむら……？」

海老村は氣絶していた。弱すぎ。

「海老村ア——ツ！！ 死ぬな——————！」

「死なねえよ……！」

ものすじくすじい言葉を口走つた庵に、間髪入れずカバンをぶつけた瑠璃華は、ズカズカと庵に近づき庵のネクタイを掴む。

「あたしを無視するたあいい度胸じゃん。庵」

「あの~？ オネエサマ？ キヤラが変わつてゐるので……ぎやー

——！」

見事に腕ひしき十字固めが極まつた。

「つわきや——！ 死ぬ——！ お助け——！ お代價サマ——！

！」

「さあ謝れ！ 謝れば先刻の事は水に流そーー！ さあ——！」

「謝れつて俺何もしてな……ぎや————！」

庵の両足はしまり、両手を広げ、まさに十字である。とその時、

「うへへやられたぜ……！」

海老村が起き上がつた。ちなみに入鹿の鹿は馬鹿の鹿である（庵

(談)

「え、海老村！？ 助けて——！ 今こそ、眞の友情をもおお——！」

「んん？」

海老村が庵と瑠璃華を見る。寝ボケていた顔が、一瞬にして驚愕に染まつた。

「な、何だよ海老村？」

「うわーーん！ 庵が女子といチャついてる——！」

「違うわあ——！」

庵と瑠璃華が、同時にカバンを海老村の顔面に投げつけた。2つ

のカバンが美しく宙を舞う。鼻血と共に。

2

「ゴールデンウイーク前日の商店街は人気が無く、まだまだ春なので5時でも日はやや高かった。

「あーっ！ もう！ 何でデパート閉まつてんのよー！」

「……、あの～？」

すぐにでもデパートの窓ガラスをかち割つてしまいそうな瑠璃華に、後ろから庵は手を上げて質問する。

「なんで俺はこんなトコを、ユカイなイルカやプロレス女と一緒に歩いているんですかー？」

飲みかけのジュースの缶が、庵の顔面に直撃する。

「誰がプロレス女ですって？」

瑠璃華が笑顔でピクピクと顔をひきつらながら、ゆっくりと振り向く。

「……いや。絶世の美ゴリラの間違いでした」

瞬間。瑠璃華の左足による一撃が庵の髪をかする。

「だ～れ～がゴリラですってえええ！？」

今にも庵に襲いかかりそうに、ふーつふーつと荒い息を立てる瑠

璃華を、まあまあと海老村がおさえる。

「じょ、冗談だつて。なんでいつも暴力に走るかなあお前は。そんなんじゃモテねーぞ」

「なつ！」

一瞬、瑠璃華から表情が消えたので、やべえ今度こそ殺されると庵は本気で謝る。一方、瑠璃華は戦意喪失したのか海老村を振り払い、歩き始めた。

「ど、どした？」

庵がきょとんとした顔で尋ねる。瑠璃華は立ち止まり、「……別に。何でもないわよ。私も買い物に付き合わせている身だし、迷惑だらうし……」「

海老村はさておき、庵としてはあまり迷惑ではなかつたのだが……。なので庵は庵なりにこの空氣をどうにかしようと思つた。

「そつか。じゃ、次どこ行く？ ストレス発散にカラオケでも行か？」

「え？ ……いいの？」

瑠璃華が庵のほうを振り向く。驚いているのか嬉しいのかどっちか分からぬ、そんな顔だつた。それに応えるように庵は優しく笑つた。

「ああ。俺も海老村もどうせヒマだしな」

と海老村の事情をまったく無視して言つてやつた。特に深い意味は無い。

「よしつ。じゃあ。行くか」と、その時だつた。

突然、庵達の田の前の「デパートの一階が爆発した。

「うわっ！ きやっ！ などの声と共に、デパートの近くにいた人たちが爆風に呑まれ、転がつてゆく。

庵もその中の一人だつた。踏ん張ろうと努力はしたが、なにせ爆発源は目の前である。災害や事故の時の対策か、割れれば粉々になるガラスのお陰でケガはしなかつたが、爆風だけでも相当な威力だつた。庵は倒れはしたが転がりはせず、地面に這いつくばつた。

「瑠璃華！！ 海老村！！ 大丈夫か！？」

返事はなかつた。この爆音と爆風である。耳が一時マヒしても不思議ではない。

爆風が止んだ。庵は起き上がり、一人を探す。まだ白煙が舞つているが、二人は割と近くにいた。瑠璃華は横倒しになつていて、対して海老村は……、

倒れているゴミ箱に頭を突っ込んで失神していた。アホらしい、と思ひながらも庵は、一人が安全なことを確かめるとデパートの方を向いた。今日デパートは休みだつたが少ない数の従業員は中についたろう。

庵は走つた。ケガをしている人がいるかもしれない。庵はただの高校生で特別な何があるわけではない。だがそんなことは関係ない。ただ彼は目の前に助けを求めている人たちがいるのに、見ていないフリをして、そしてその後、動かなかつた自分を後悔したくなっただけである。

その正義感は、何度も、大切な人がいなくなるという悲しみを経験しているからか。

だが、それは庵がやらないといけない訳ではなかつた。いや、それは庵のやるべき事ではなかつたのかもしれない。

庵は煙の中、デパートの一階の真ん中のホールに立ち止まる。辺り一帯は崩れに崩れ、とても危ない状況である。

「おーい！！ 誰かいないか！？ ケガとかしてないかー！－！」必死に叫ぶが返事は無い。

「くそ……、どうする……！」

「 ちょっと。なんでここにいるの？」

ふいに聞こえてきた声に、反射神經で庵は振り返つた。そこには細長い剣を抱えた少女が立つていた。

身長は庵より頭一つ小さく、小柄な体型だった。金色の短髪は前、

右、左と一ヶ所ずつ黒いリボンでまとめてあり、左の方だけまとめきれていない髪がはみ出している。瞳は鮮血のような紅で、それを囲む目の輪郭は少しだけつり上がりついて強気な性格が見え隠れしている。服はそこらの女子と変わらず、おへそを出した一枚着の黒いシャツにダボつたズボンを着ていた。

その少女はたいした飾りもされていない剣を肩から降ろすと、一息ついて、

「ここは危ないから、一般人はさっさと逃げて」

「な、お前だつて一般人だろ！！　お前も逃げるよ！！」

「その必要は無いわね。さっさと敵を捕まえないといけないの」

「敵？　デパートを爆破した奴がいるのか？」

「……余計な詮索はしないでくれる？　ケガしたくなかったらさつさと逃げて」

少女は無愛想な顔を庵にぶつけて言った。

「逃げて。つてお前はどうすんだよ！？　そんなオモチャの剣で戦うつも！」

刹那、少女が後ろにあつた石製のキャラクターの像に剣を叩きつけた。

「なつ……！」

像は斜めにスッパリ切り落とされた。轟音がホールに小さく響く。

驚き顔で像の切り口を見つめる庵を、少女は無表情で眺める。

「分かつた？　私は逃げる必要がなくて、あなたはある。心配してくれるんなら嬉しいけど、ここにあなたがいると私も危険になつてくるの。だから逃げて」

少女は無表情だったが、無表情だったからこそ自分を本気で心配してくれているのが、庵には分かつた。

「……でも、ケガした人たちとか……、」

「大丈夫。あとで保護しとくから」

「そつか。ありがとな」

「え？」

少女は驚き顔で庵を見ている。庵はよく見ると可愛いなーとか思いつつ、

「『え？』つて、え？ 僕、何か失礼な事言つた？」

少女はハツ、と我に返るとすぐにそっぽを向いてしまった。

「いや……なんでもない……、気にする必要は無い……」

？ と頭をかしげる庵。よく耳をすましてみるとデパートの奥から騒がしい音がする。

「じゃ、私は行くから。あんたは逃げときなさいよ」

「分かつた。氣イつけてな」

という言葉がかけられない程、少女はさっさと行ってしまった。

「……よし。俺もとつと退散するか。ここにいても邪魔らしいからな」

庵も出口の方を向いて瑠璃華達の所に走った。

デパートから出てきた時、庵は異変に気づいた。あれだけ大きな爆発があつたのに関わらず、野次馬どころか瑠璃華達、いや、人がいなかつた。

「……、これつて……？」

普通、野次馬が来てもおかしくないし、それより警察が来るはずである。だが庵がさつきまでいたこの商店街は、まるで廃墟のように入気が無かつた。

「どうして……、瑠璃華達は……？」

その時、ふいにデパートの前の電器屋のガラスが目に入った。そこには、倒れたゴミ箱、デパートのカンバン、自分、

そして両手にそれぞれ拳銃と手榴弾をもつた、血まみれの中年の男がデパートの入り口に立っている姿などが映っていた。

「 ツー！」

庵は驚いて振り向こうとしたが、

「あ、つあ、一つ！ ガキ、動くな」

血まみれの男は震える手で、だが力を込めて拳銃を庵の背中に押しあてた。

ガラスに映った手榴弾が鈍く光る。

庵は進むべきではなかつたのかかもしれない。

4

デパートの中は暗かつた。

あの時の手榴弾のお陰で、ブレーカーが落ちたのか……、と金髪の少女は崩れたデパートの中を歩く。足元を流れる白煙はデパートの入り口へと向かっている。

「……外、かな。でも人目に触れるのはあっちにひとつても不利なハズ……」

かと言つて逃がすわけにもいかない。少女は振り返つて白煙の流れの方へと足を進める。

庵と血だらけの男は、かれこれ15分そのままの姿勢で硬直していた。目の前のガラスごしに見える男の体は、あちこちに切り傷やワイヤーで絞めつけられたような跡があつた。

「あ、一つ！ くそつ！ 手間かけさせやがつて、あのチビガキイ……」

あの少女の事だろうか。あの時、彼女は多分この男を倒しに行つたと思う。その後この男が出てきたということは……。彼女は大丈夫なのだろうか。

「……あんたが『パート』を爆破したのか？」

「あ、？ そうだよ。なんか悪いのか？」

庵は驚いた。建物ひとつ爆破すると中にいた人や、周囲にいた人がケガをしたり死んでしまったりする。実際、あの『パート』にも中は何人が人がいたろう。

建物を壊すという事は、物理的にも間接的にも多くの人を苦しめる結果になる。常人ならそんな事は出来ないだろう。

それをこの男は「なにか悪いのか？」と言つた。

人を苦しめることに、人を殺すことにも感じない。

庵は心の底から恐怖を感じ、そして同時に大きな怒りを感じた。

「あんた本当に、悪いことをした、って思つてないのか……！」

「あ、ー！？ 思つてねえよ！ だから何だつづーんだ！！」

庵の中で何かが爆発した。一発殴らないと気がすまない。いや、一発では足りなすぎる。

「てめえ……！！」

庵が右手に拳を作つて振り向こうとしたその瞬間だつた。

「動くなっ！！」

庵の拳が止まる。

その声は庵のものではなく、男のものでもなく、透き通つた女性の声だつた。

声の音源は前や後ろでも、ましてや右や左でもない。上だ。

庵と血まみれの男は紅がかつた空を見上げた。

二人の前にある電器屋の屋上、そこに、

細長い剣を抱えた金髪の少女がいた。

「あなたねえ……、早く逃げろって言つたでしょ？」

少女は空いている片手で頭を搔きながら、呆れた表情で言つ。しかし、その顔には少し安心したような感情が混じっていた。

庵もまた、安心した表情を浮かべて言つ。

「お、俺だつてけつこう心配したんだぞ！」この男にやられてしまつたんじゃないかとか！』

なつ！ つと少女の顔が赤くなる。

「私がこんなザコにやられる訳ないでしょ！ バカにしないでよバカ！」

「バ、バカだと…！ お前だつて敵逃がしてんじゃん！ バーカ！」

庵は怒ったような顔をしているが内心はすごく嬉しかった。なんだからんでこの少女のことをつけつこう心配していたのだ。

(……、あれ？ なんか一人忘れているような……)

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、…！ うるぜええ…！」

庵と少女が男に注目した。ザコ呼ばわりされて少々キレ気味である。男は庵を引っ張り、盾のようにしながら頭に銃をつきつけ、「いいか！！ 動けばコイツを殺す！ まず獲物を降ろせ…」

少女はヤレヤレとため息をついて、

はい、と

庵がいる方向に、剣を豪速球で投げてきた。プロ野球選手も驚愕のスピードである。

「えつ！？ うつそ！？ わ――――！」

時速200キロほどの速さで、自分自掛けで飛んでくる剣に、庵は絶叫しかできなかつた。その剣は人間の神経の循環より速く、バギヤン！ と庵につきつけられた銃を貫いた。

「なつ！？」

しかし、血まみれの男もそれでボーッとしているようなバカではなく、庵を引き付け手榴弾を構えた。

「あ、 ガキイ……、ふざけたマネしてくれんじゃねーか……！」
「だーれがあんたみたいなの言う事聞くと思つてるの？ 私は警察でも自衛隊でもないのよ。人質とったところで何も変わりはしない。あんたを殺しちゃいけない必要も無いし」

人質の前で容赦の無いことを言つてくれる。要はその手榴弾で二人死んでくれた方が手つ取り早いということである。〔冗談でも怖い。冗談に聞こえないのだが。〕

「ま、それが私たちのマニュアルなんだけど、私は殺し屋じゃないしね。私の場合は人質は放つとけないし、あんたも放つとけない。できるだけ死人はゼロにしたいの」

彼女は軽い口調で言つたが、それは彼女が一番大切にしている事というのは庵にも良く分かつた。もしも、この男のように人を殺しても何も思わないような奴なら、あの時庵に「逃げろ」とは言わなかつたハズである。

「で、どうすればいいの？」

「……両手を頭の後ろに組んで座れ」

彼女は言われた通りに両手を組み、その場で女子座りした。

庵はホソとした。もしかしたら今度は飛び蹴りーーー！ とか飛び頭突きーーー！ とかくるかも、とドキドキしていた。彼もやつぱり自分の命は惜しいので「俺はかまうな！ やれー！」などは言えないのである。だが、あの少女の睨み度を考えると迷惑かけてるなーとは思う。情けないことこの上なしである。

(言えません！ ホントすいませんけどまだ死にたくないですまじで「ゴメンなさい！」)

心の中で懺悔する庵に呆れ、少女が口を開いた。

「……ねえ、なんでこんな力持つて悪い事に使うの？」

その声は悲哀と、優しさで満ちていた。

「あ、？俺が何しようが勝手だろうが？」

男のその言葉に庵はムッとした。そうだ。あんな、軽い一撃で石像をスッパリ斬れる奴を出し抜くほどの腕前だ。何の動機があつてデパートを爆破したかは知らないが、それで有名人のSPとかになつたら儲かるだろうに。

少女は続ける。

「じゃあ、何で悪魔なんかと契約したの？」

……。

「うつせえな。どうでもいいだろうが」

いや！！ どうでもよくない！！ 悪魔！？ あの角生えて口

ウモリみたいな翼のついたあの！？

えええ！？ と庵は頭の中で絶叫する。

そんな奴を脇目に、話は進む。

「……そんなに組織が大事？ 組織の為だつたら自分も殺せるの？」

「ハツ。自分の為だよ。俺はよ、力が欲しいんだよ。何も恐れなく

ていい程の絶対の力がな」

あの～～？ 話についていけません。誰か～。説明して～。

……あ！ そうか！ ドツキリか！ なるほど！ こんな手の込んだドツキリ……。いや～俺も有名人になつたもんだな～。どこに力メラあんのかな～。

「……、悲しくなってきた……」

自分の平和ボケした想像力に脱力しかけた時、庵は気がついた。少女の方から何か、音がする。チリチリと大気が振動するように、カサカサと砂が鳴るように、とても小さいが複雑に絡み合つた音がする。男は気付いていない。

「風？ 庵は思った。が、違う。感覚的に何かが違う。

「あんた……救えないね」

少女が悲しげに言つたその瞬間、風が、止んだ。そして同時に、

大量の羽根が辺り一面に出現した。

「なつ……！」

それはまるで天使の翼のような白く、微かに輝く羽根だった。

「チイ……！　てめえ！　」

「悪いけどのんびり語り合ひ暇はないな」

少女は立ち上がり、こちらへ飛び降りてきた。

そんなトコから飛び降りてくるなんて、もう何でもアリだなあ！

！　この羽根もさあ！！　心の中で叫ぶ庵はふと気付いた。

男が動かない。手榴弾を使えばいいのに、それをしないどころか手榴弾を持つ手が震えてさえいる。

少女が庵と男の前に着地した。

その手が地面に突き刺さった剣に触れる。

「てめえ……名は？」

その声に勝氣はなかつた。

「竜串ルナ（たつくり るな）。絶対正義組織フリーメーソンのメンバーよ」

そして、白い羽根の中で鈍い音がした。

日記にもできないような平和すぎる日々は、終わった。

第一章 「再開と蜂のページ」

『え～。相変わらず日本のほぼ全域が低気圧に覆われ、天気が崩れやすくなっていますのでお気をつけください』

それほど広くはなくとも、やはり一人のリビングに声は響く。ソファに座った庵の耳に、お天氣お姉さんの声が壁やカーテンに反射して余計大きく入ってくる。

対する庵はテレビの方を向いてはいるものの、ぼーっとマヌケ面で上の空。

「……夢？…………とは思わんけどさ、俺、今日死線をくぐつたよな」
庵は呟く。

今日、彼は凶器を持った男に人質にされ、それをルナとかいう少女に助けられた。

男は彼女の剣（レイピアといつらしげ）の柄でみぞおちをやられてのび、彼女に連行されていった。彼女には「もうすぐ私の組織の人達が来るからさっさと帰つて。それと、この件は他人に口外しない必要がある」とだけ言われた。庵は帰る前に瑠璃華と海老村を探したがいなかつたので、帰つて海老村に電話を入れてみた所、

「……、なんであいつ……」

その時の会話が妙だった。あれだけの事があつたのにも関わらず、その事を話しても、「あー。そんな事もあつたなー。でさ、庵、明日ヒマ？ ボウリングとか行かね？」と、そんな事どうでもいいと

言つ感じだつた。

俺的にはあれで24時間は話し込めるんだけどなー、と思つたが、悪魔とか天使の羽根とかフリーーメン？ とにかくそんなアタマノオカシイヒト的な事を話しても、いいカウンセラーを教えてもらえるだけなので庵は言わなかつた。はー、と溜め息をつくとソファに倒れ込んだ。

「……俺みたいな一般人の知らないトコでいろんな事があつてんだなー。……竜串ルナ、か」

庵はある少女のことを思い出した。なぜだろう。彼女とはこれからも会う氣がする。

「……気になつてる？ いやいやまさかな、何で俺が明らかに年下の……」

ふと、彼女の自分を見た時の少し安心した表情を思い出す。それは庵だつたからではなく、あの立場にいれば誰にでも向ける表情だつた。が、庵は内心それが嬉しか

「だーーッ！！ もうあいつのコト考えんのナシナシ！！」

庵は髪をぐしゃぐしゃと搔いてソファに顔を沈める。

「あ～～、もう……」

その時、ピンポーンとインターホンが鳴つた。とにかく別のこと集中したかつた庵は、ガバッと起き上がり、猛ダッシュで玄関へと向かつた。

はいはいー、と庵が鍵を掛けてないドアを開けるとそこには、

黒い男の人があつた。

黒人という意味ではなく、ただ体の表面の7割以上が黒で埋められた人だつた。要は黒スースに黒革靴である。どこからどうみても昼に活動しない世界の人見える。

第一印象、「今すぐドアを閉めた方がいい人」

庵は無言のままドアを閉めた。

「……、やっぱ家にいる時も鍵は掛けとくモンですな……」

しばらぐの沈黙。

ピンポーンと、またインター ホンが鳴った。

「やばい。さつきのアクションで俺がイヤミな奴と見られたかも。ドアを開けたらバーン！ って展開はヤダなあ……」

庵はぶつぶつ言いながら、しぶしぶドアをちこいつとだけ開ける。

「はーい……」

庵がスキマから相手を覗こうとした時、スキマに黒い人が顔をぬつと出してきた。

「おわっ！！ あの、うち仏教でいくんでえ！！ ジャあ！！」

庵はドアを閉めようとしたが、『待つて下さい奥さん！』的に黒い人がドアに靴を挟んできた。

「獄魔……庵さん、ですね……？」

「そ、そっスけど……。何スか……？」

庵は引きつった笑顔で言葉を返す。わー！！ 名前知られてるー！！ やべ、なんか俺悪いことしましたか！？ と心はパニック中である。

「あなたのお父さん。……について話があります」

2

庵は自分の作るコーヒーの味には自信がある。

今回のお客さまは渋キメの黒ソースおっさんなのでブラックをつくつた。要はコーヒー豆に適量のお湯を注いだだけである。何か悪いか。

庵は台所からテーブルに行くと黒い人にコーヒーを出し、彼の前

に座つた。

黒い人は「ヒーローを少しずつて、つてか黒い手袋外そうよ。

「まづは血口紹介しておきましょうか、私の名前は切坂きりさかとでも呼んでください。率直に言ひますとあなたのお父さんのパトロン……資金提供をしている組織の者です」

「…………、」

庵は唖然としていた。あんな人当たりのよせうで明るい父親が、まさかこんな人達と付き合つていたなんて。

「あなたのお父さんはですね、詳しくは言えないのですが、とても重要な研究をしていましたね。それゆえにその技術を欲しがる国や組織、富豪から狙われていました。事実、幾度か拉致されたりしています」

「…………、」

そうだろう。ある国が新兵器を研究していれば、他国はその技術を手に入れようとする。簡単な話、A君が新しく買ったオモチャを皆で取りあうと同じことだ。それを避けるには嫌でも『セキュリティ』というのが必要になってくる。

切坂は続けた。

「そして今回の行方不明もそれなのですが……」

庵は思つていた。

それだけ拉致されても、変なお土産を片手に笑顔で帰つてくるぐらいだから、今回も大丈夫だらうと。

だが、

「あなたのお父さん、獄魔ひとやま蒼あおさんは」
違つっていた。

「ドイツのヘッセン州にて、死体で発見されました」

「…………え？」

止まつた。呼吸が、思考が、全てが。

唇、手、足から血の気が引いてゆく。

自分の父親は、苦痛を息子には見せまいとしていただけだつた。

何も言えない。というか何も考えきれない。

その時、インターホンが鳴つた。庵は我に返り、よろめいた足で玄関へと向かう。ドアを開けようとしたが開かない。よく見たら鍵がかかつっていた。庵は鍵をあけ、ドアを開ける。

ドアの向こうには、フードを被つた子供がいた。フードを被つている所為で顔が見えない。子供といつても庵よりやや背が低いだけである。怪しい、とは思わなかつた。今の庵にはそんなことを考えられる余裕などなかつた。

「あの……何？ 大した用じやないなら明日にしてくれないかな……」

庵は適当に答えた。

ところがその子はいきなり庵の腕をつかみ、家の外に引っ張り出した。急に手を放されたので、庵はしりもちをついてしまつた。

「いた！ てめ……！」

庵は怒鳴ろうとしたが、口を手で塞がれた。

「しつ。静かに……！」

その声は聞き覚えのある女性の声だった。その子は玄関を覗き、辺りを見回してから、

「あなたを保護しに来ました」

と、ぎこちない口調で言つてフードを外した。

そこには、

とても見覚えのある金髪の少女がいた。

「あ……」

目を見開いているのは庵だけではなかつた。彼女もフードの所為

で、じつちの顔までは確認してなかつたらし。

沈黙する一人。

先に口を開いたのは少女の方だつた。

「よりによつて……、あなたとはね……」

「な、聞き捨てならねえ！　じゃあお前はビーウー奴が良かつた！
？　言つてみ！？　怒らないから！…！」

庵は立ち上がり、小言で怒鳴つた。対して少女は腕を組み、「そうねえ、科学者の息子だから、もつと頭のよさそうな人かと『科学者の息子』という単語に、庵は反応した。この少女に会つた時に込み上げてきた元氣が失せていく。

「……あのさ、お前がどうやつて俺の父さんが科学者だつたことを知つているのかは知らないけどさ、実はもう、俺の父さんは『言葉はそこで区切られた。庵にではなく、少女に。』

彼女は両手で庵の両肩を押さえ、庵を見つめていた。

「なんで……あんた、知つてんの……？」

その顔は驚愕と、緊張と、焦りで満ちていた。

庵は場に合わないがあまりに少女がまじまじと見つめてくるので、目を逸らして、

「今、俺ん家に來てる人に教えてもらつた」

やつぱり、と少女は咳きながら庵から手を放す。

「あんたのお父さん、どうなつたつて？」

庵はあまり言いたくなかったが、この少女が悪意あつて聞いてきてるとは思えないでので答えることにした。

「……、死体で発見されたつて」

「それ、嘘よ」

……。

……。

……。

ん？

「だから、あんたのお父さんはまだ生きてこる、って言つてこるの。

別に、あなたを安心させようとしてるんじゃないからね。あなたは真実を知る必要があつたから」

唚然。田の前の少女は本当の事を言つてゐる。と思ひ。今さつき教えられたことに絶望し、それは全部ウソでした！……って、じやあ、

「じゃあ、俺にウソついた入つて」

「敵。恐らくはあなたの父さんをやつした組織」

「え？ さらわれてんの！？」

「生きてはいるけどね。いろいろ事情があるらしいから」

素直に喜んでいいのや。とにかく、父親は生きていて、あの黒

スーツおっさんは敵らしい。

「……俺はどうすりやいい」

「まあ、ここから逃げるの。多分そいつはあなたを消しに来たか、面倒な事を考えないように思考を植え付けに来たと思つ。あなたはこんな事に巻き込まれる必要はないのに」

また、『逃げて』

「お前はどうすんだよ？」

少女は玄関を見ながら、

「そいつは家の中にはいるんでしょ？ あなたのお父さんを助け出すための情報収集のためにも、そいつを拘束する必要がある」

「戦うのか？」

「抵抗すれば、ね」

その言葉に庵は怒つた。

「そんなのダメに決まっているだろ！？ 自分が戦うからお前は逃げろつて、そんなんで俺が嬉しくなると思つてんのか！？ 女の子一人、危険な場所に放り込んで、へらへらと平気な顔して逃げれる奴だと思つたのか！？」

「じゃあ、あんたは戦えるの？ 死ねる覚悟があるの？」

「……死にたくねえよ、……それに俺はそんな特別強いわけでもない。俺なんかよりお前の方がはるかに強えよ。でも、守つてもらう

ばかりじゃいけねえだろ。俺だって何か……」

その時、ヒュンという風切り音と同時に、少女が庵を蹴り飛ばした。庵はまたしりもちをつく。

「つてえ！！ 何すん……！」

「死んだ方がマシだつた！？」

少女が庵のいた場所を指差す。そこには軍人が使うような背がギザギザになっている軍用ナイフが2本、突き刺さっていた。刺さっている角度からして家中から飛んできたと思える。

少女は玄関を睨んでいる。

「よオよオよオ。ヒトヤマサンよオ。客をいつまで待たせん氣だア？」

玄関の奥から切坂の声が響いてきた。だが、口調はさつきまでとは全く違う。

まるで生かす意味はないと言わんばかりに。

玄関からコツコツと足音が響く。

「なアなアなア？ 何か？ やつぱムさい男より、ピチピチの女が良かつたクチか？ ワリイなア。そこまで氣イきかなかつたわ」

そして、玄関から現れたのは、女性だった。

長い黒髪に黒い瞳のすごい美人だった。服装は黒スーツ、まるで切坂が変装したように全く同じものだ。

その女性は庵の方を向き、怪しい笑みを浮かべ、口を開いた。

「なアなアなア。やつぱ日本人は」ジャポネ「——ゆー女がいいか？」

「……ッ！」

その声は確実に切坂だった。

「てめ……ッ！ 誰だ！？」

女は、女性とは思えないほど口の端をつり上げて、

「おイおイおイ。決まつてんだろ？ 切坂だよ。ま、偽名だがよ」
バギンと切坂の顔にヒビが入る。そして、まるで風化した歯を叩くように、割れ、剥がれ落ちてゆく。

出てきたのは青年。身長は庵より高く、灰色の混じった銀の長髪につりあがった目、つりあがった口と、とても挑発的な容姿で、服はそのままの黒スーツである。よく見ると首や首元に古傷が複数ある。

ただ見られているだけなのに、それだけで自分を殺そうとしているのが分かる。この威圧感を『殺氣』というのか。

「本当の名前はなア、デッドバー・リング。ノイズの殺し屋及び幹部だ。よろしくなア」

3

すっかり夜の住宅地を照らすのは、頼りない街灯と住宅のカーテンのスキマから漏れてくる螢光灯の光、そして綺麗な満月。その精錬された月光さえも浴びる人によつてその効果は変わつてくる。後ずさりする少年には、動搖を。

金髪の少女には、勇姿を。

銀の青年には、妖異を。

海に近いせいか、匂いのある風がこの道路を吹き抜けていく。狭い道なので車が通ることはなさそうである。

「……、変装術……あんた、その図式はどこで？」

「あアあアあア。多神道には無エ図式だかんな。気になんのは分かんぜ」

「ノイズ……変装術、多神道はない……。やつぱり、魔術……」

「あアー。フリーメーソンは魔道が嫌エだもんな。どつする？ 僕様を殺しちまうか？」

デッドバー・リングはポケットに手を突っ込んで答えた。挑発しているようだ。

対して、少女は冷静な顔で、「そんなことはする必要はない」

瞬間、三人の半径一メートルぐらじまで、まるで球を作るよつて、あの白い羽根が出現した。デッドバーはヒュー、と口を鳴らす。

「ただ、あんたがここでコイツに何をしようとしていたのかを聞きたいだけ。……抵抗すれば私は、あんたと戦うことになる」

「んー？」とデッドバーは首を傾げ、目の前にある羽根を手ではらう。そして手をポケットへと戻し、トントンと少し跳躍してから、まるで、今すぐにも噛み付けそうな凶暴な顔で少女を睨みつけ、「あアあアおイ。教えつと思つてんのか、あア？ ガキ、てめえが村崎を倒した奴だろ？ ハツ、抵抗だと？ ナメんな。見下してんじゃねえぞオイ」

デッドバーがポケットから右手だけを引き抜く。その手にはナイフが握られていた。

「！…………やめ…………、あぶ

」

庵が叫んだ時にはもう遅く、ナイフは少女目掛けて放たれた。その刃は幾つもの羽根を貫き、もう少女の目の前……、

で止まった。

「は……？」

あまりに予想外の出来事に、情けないほどに間の抜けた声を出してしまつ。

刃に三枚の羽根をつけたナイフはあつけない程にからんと落ちた。普通ではありえない。ナイフは野球選手の放ったボールのような速さで、少女の顔面目掛けて飛んでいた。

それが、いきなり止まつた。

デッドバーの口笛が響く、

「……へエ、衝撃吸収の付加ねエ。それで村崎の手榴弾を逃れたつて訳か。

……だが今ので三枚、俺と殺り合ひには少なすぎんじゃねえの？」デッドバーが再びポケットの手を突っ込み、抜ぐと、どういう原理かまたナイフが握られていた。そしてそれをせつときと同じように投げる。しかもそれを一度で終わらず、一秒に一本ぐらいの速さで繰り出す。

その全ては羽に押さえられ、空しい音を立てて落下する。ナイフの連射が止まる頃、その数約一十本。無造作に散りばめられていた。

そして、

「おオおオおオ。ナイフ一本辺り三枚、二十本で六十枚。ハツ、やつぱ少ねえな。俺は後八十本はいけんぜ？」

少女の出した羽根も全て、ナイフと共に落ちていた。

「……、」

「なアなアなア、降参しろよ。今、尻尾巻いて逃げんなら許してやつてもいいかもねエ」

少女は極めて無表情。

やがて一つのため息と共に出した答えは、

「田の前に殺されようとしている人がいるのに、見殺しにする必要は全く無いよ」

その瞬間、辺りに散らばつた羽根が消えると同時に、少女の周りにまた羽根が出現した。

デッドバーはまた口を鳴らし、

「降参する気ナッシングつてか？」

「生憎。私の戦いにそんな言葉ナッシング

そして少女は何処から取り出したのか、レイピアを構え、デッドバーに突っ込む。

4

デッドバーは素早くポケットから両手一本ずつナイフを取り出し、クロスセセで少女の振り下ろしを防ぐ。鈍く鋭く響く金属音が、耳をつんざく。

「へエヘエヘエー！ いい筋してんじゃねーか！！ この羽根の衝撃吸収の付加で上手エ事、体への抵抗をなくすこと、身体能力が100パーセントの状態で戦えるつて訳か！ 上出来だぜーー！」

「グダグダと……、うるさい！！」

左、上、右、中心と少女が剣を叩き込む。デッドバーは体をくねらせ、ナイフでそれらを受け流していく。まるで、子供の遊びに付き合っているかのように笑いながら。

「ほオほオほオ。型にはまっちゃいねエが……そこは経験でカバーつてか！？ カハハハハ！！ それでよく村崎を倒したモンだ！！ あいつ、相手が子どもだからって手エ抜き過ぎたんじやねえの！？」

少女はかまわず攻撃し続ける。デッドバーはしばらく笑いながら戦っていたが、

「だが

その声から笑いが消える。

「分かつてんぜ？ その軽い身のこなしと剣を片手で振り回せるのは、この羽根のお陰なんだろ？」

「それが、何だって言うの！？」

少女が鬱陶しそうに叫んだその瞬間、

ぱすん、と周りにあつた羽根が全て消えた。

「なッ……！」

そんな、と思った時にはもう遅く、少女はバランスを崩す。羽根による微妙な体の抵抗、重力、重量の調節がなくなり、その全てが衝撃となり、少女の華奢な体に一気に叩き込まれる。

少女は地面に倒れた。ただ地面に倒れるならまだしも、今さつき体に叩き込まれた衝撃が地面から跳ね返つてくる。バキメキッ！ という音と共に彼女の体が少し浮き、また地面へと帰つていいく。

「が……！」

少女は激痛をこらえ、立ち上がるひつとした。が、デッドバーの足がそれを阻む。デッドバーの右足が少女の頭を地面へと叩き付ける。

「あがッ！！」

悲痛を嘆く少女の上で、デッドバーは笑いながら、「よオよオよオ。術一つ消されたぐらいでこれかよ？ 不思議だろ？ 何で羽根が消えちまつたのか」

少女は片目を深く閉じたまま込み上げる悲鳴を歯み潰し、口を開いた。

「まさか……、あのナイフ、が……？」

「そオそオそオ。よーく分かりましたねエ。

教えてといでやる。俺の契約した悪魔『マルバス』。こいつの能力は契約者の姿形を自在に変化させる。……つつても一応制限があるだけだ。

そしてもう一つ、敵につけた刀傷は決して癒えない！ それを応用すれば、さつき『殺した』お前の羽根も消せるつてこつた

「……でも、あの羽根とさつきの羽根とは少しだけ違う図式を……！」

「そう思うだろ？ でもな、これが魔道だぜ。いいだろ？ ひょり

とした矛盾なら許されんだよ

「……ツ！！ そんな事……」

少女が羽根を出現させようとする。

だが、今度は出現さえもしなかつた。

「……！」

「だーかーらーよ」

デッドバーが少女の頭から足をいつたん離し、また踏み直す。

「ぐッ！」

口を切つてしまつたようで、少女の口からは血が流れる。

「無駄だつてんだろ？ 哀れだねえ。人の為に命を賭けといて、そんなんで殺されるなんてな。最終的にお前は誰かを救えたのか？」

今救えても、明日そいつは殺されるかもしだぞ」

少女は少年がいた場所を見る。だが、そこに少年の姿はなかつた。（よかつた……。逃げてくれた……）

悲しくはなかつた。むしろ嬉しさがある。

そもそもあの少年には何も期待していない。

そう、ただ人を守りたかつただけ。

そう、たとえその所為で命を落とそうとも。

それが「竜串ルナ」の意味だったから。

（まあ、こんな化け物みたいな人間同士の戦いを見たら、逃げ出すのは当たり前かな）

「お？」

少年がいないことにデッドバーも気づいたようである。

「よかつたなア、ガキ。お友達は尻尾巻いて逃げてくれたようだぜ？ まあ、お前の死も無駄にはなんなかつた、…………かもな」

「……、かも……？」

「なアなアなア。俺がフリーメーソンがマークしてゐる人物に接触するのに、わざわざ一人で出向くと思つてんのか？」

「……ツ！ ま、やか……！」

確かに、「獄魔庵」はその父の誘拐ゆえ、数多の組織にマーク

されていたハズだ。そんな中で彼に接触するとなれば、当然危険になつてくる。

大は小に兼ねる。

一人より二人。

一人より数人。

デッドバー・リングは一人では来てはいなかつた。

「…………ツ！」

少女が立ち上がるうとする。が、デッドバーの足がそれを拒む。
(くそ……考えが甘かつた……！！　あいつを……助けないと……
！！)

「ハツ、無駄だつてんだろ」
デッドバーが鼻で笑つたその瞬間、

「う……おオオオオオオオオオオオオオオ！」

聞き覚えのある声と同時に、誰かがデッドバーの背中に体当たりをした。予想外の出来事にデッドバーの体が吹っ飛び、家の壙にぶつかる。

重力から開放された少女の見上げた先には、一人の少年が立つていた。

「な……、んで……？」

特別な何がある訳でもなく、
自分と特別な関わりがある訳でもなく、
赤の他人なのに、
赤の他人のために、
目の前に立つている少年はただ、

「俺が逃げるワケねーだろ?」

自分のためにここへ来た。

「弱いくせに……」

そう、ただ人を守りたかつただけなんだろう。
そう、たとえそのせいで命を落とすとも、

そう、それはまるで誰かのやうな。

5

悲しいはづだ。少女は身を呈して少年を助けた。しかし少年はその思いを裏切つてここへ来たといふのに、
(なのに、なんでこんなに……)

何がが溢れてくるんだろう、と少女は思った。

少年は右手に握っている金属バットを肩に置いて、
「いやー、何か戦えるモンが無いか探してて……」
「なつ……！」

少女は起き上がろうとしたが、すぐに倒れてしまった。
(……ツー！ 脳が揺らされて、平衡感覚が麻痺してる……！)

「お、おい。大丈夫かよ……」

「逃げて！！ そんなガラクタで倒せる相手じゃないの！！ 路地
裏のケンカじやないのよ！！」

心配して近づいてきた少年に少女は叫んだ。

自分をかばつてこの少年が死ぬなんて悲しすぎる。少女は最後まで自分一人の犠牲を選んだのだ。

庵はそれが分かるからこそ、少女の言葉が気に障った。

「……、分かってることで……。あんな奴、俺がバット持つて向かっていつたところで、返り討ひに合っただって」

「じゃあ……！」

少女は説得するつもりでいるのだが、その表情がボロボロすぎた。庵はその表情を見ても、さらに決心を固めるのみ。そう、答えは決まっていた。

「でも、どうしてもお前を護りたいんだよ」

「えあ……、」

少女の頭の中が空っぽになつた。ていうかなんか顔、熱い。そういう意味じゃないと思つけど、そういう意味なんだろう。

数秒後、ハツと我に返り、首をブンブン横に振りながら、

「そ、そそ、それでも！ わた、私の事より自分の心配をしなさい！」

少女は赤い顔のまま両手を固く閉じ、吐き捨てるように叫んだ。
あのな……、と言いかけた庵は何かを閃いた。ピーーンとこう音が似合いそうである。

「じゃあさ」

庵は少女を指差して、

「な、何？」

「お前は俺を護ってくれ、その代わり俺がお前を護るからー」
「はアー？」

少女は条件反射的に即答した。彼女は立場上、庵を護らないといけないような立場にあるので、「お前は俺を護ってくれ」は分かるのだが、「俺がお前を護る」はさつきの言葉といい何か違っている。それなのにこの少年ときたら、

「ちょっと待ちなと」

「よしーーー決めたーーー俺はそれでいくーーー」

「…………」

唖然。まるで小学生。もう、こいつには何を言つても無意味なんだろうな、と悟った少女は説得を諦めた。

「……、はあ……。もう、それでいいわよ……」

少女は次々とこの少年に裏切られているのに、何故か笑微つていた。自分でも分からぬくらいに。

だが、そんな平和な時間は一瞬でしかなかつた。

ドスッ、という鈍い音と共に目の前の少年が倒れる。

「か……っ！…！」

「……ッ！」

庵はまるで全身の力が抜けたように崩れしていく。金属バットが軽い音を立てて転がる。

庵は少女の前にいたので、ちょうど少女の目の前に庵の体が転がつた。

「ち、ちょっと…！ 大丈夫…！」

少年はビクともしない。少女は手を伸ばそうとしたが、それさえも出来なかつた。

「……ッ。どうして…！」

「あ、アあ、アあ、ア…！ クツソ…！ ナメやがつて…！ あー、
いてエ…！ ちょっと氣絶しけたぞコラ。何で俺様がこんなクズみて
てエな奴にやられねーといけねーんだ。クソが」

声の持ち主はすぐそこまで来ていた。片手には血のついたナイフ
が握られていて、ポタポタと血が滴つている。

「…………！」

少女は、デッドバーが少年に何をしたかはすぐに想像がついた。
だが、それを認めるとは難しかつた。

「あんた…、何を…？」

「あ？ 別に殺しちゃいねーよ。ま、放つといったら死ぬけど。……」

「あ？ お前からは何処刺したか見えねーか」

ほり、デッドバーが庵を足で転がす。少女としてはデッドバーを睨み付けたいところだが、そんなことより少年の方がずっと大事である。

見えるようになった少年の背中は血みどろだった。左脇腹にはナイフが一本刺さっていて、右肩辺りを斜めに深く斬られていた。たとえ今生きていくようとあと一時間も持たないほどの重傷だ。

「あ、う……あ……」

少女の全身に緊張が走った。今まで、どうやって呼吸をしていたのかが分からなくなるほど息が苦しくなる。

「にしても、こいつバカだな。そのまま逃げてりゃ、もう少しつと長く生きられたのに、わざわざ死ににきやがつた」

デッドバーがスースに付いたホコリをはたきながら笑いの含まれた声で言つた。

「そんな事な……」

少女がデッドバーを睨んで、叫ぼうとした時、

「そんな事ねえよーー！」

少女とデッドバーは庵の方を見た。庵は続けた。

「今日、知り……合つたばかりだけど……、何か、特別な関係があるわけじゃ……ないけど……」

少年の体がゆっくりと起き上がる。傷口から血が吹き出す。だが、そんなことは関係ない。

「でも、そいつは俺のために、自分を犠牲に……したんだよ」少年は立ち、朦朧とする目で、それでも強い眼差しでデッドバーを見た。

そして、叫ぶ。

「そんな奴を護りたい、って思つ」とは、そんなにくだらねえのかよッー！」

「放つとけない……、ねエ……」

デッドバー・リングは咳いた。その右手に握られたナイフから滴る血が、彼の足元を染めてゆく。

(こいつ……、致命傷のハズなのにな……。それほど意志が強エつてコトか)

目の前に立っている少年「獄魔庵」。デッドバーはある事情により、彼の命を狙っている。先程そのカタをつけた。

(ハズなんだけどなア……)

彼にとつて人を一人殺すのなど気に止めることではない。

それは、彼の中の過酷な記憶ゆえのもの。

(昔に比べりや、今は全然殺していねえ方だ) けど、と思う。

(こんな景色見てたら、殺したくなくなんだよなア)

今さら遅いのだが、と少し思う。

(つつても、こーゆー人間は強エンだよなア) 俺と違つて、と深く思う。

(……ツ！……けつこー、傷口がマヒしてきたな……)

庵は引きつった笑みを浮かべる。それが痛みなのか、気の緩みなのかは本人にも分からない。もともと氣絶していい意識にムチを打つて正氣でいるのだから、とにかく何かに集中してみたいのだ。ふと、足元がブレて、ガクンと左膝が落ちた。

「とつ、とつととーーー！」

上手くバランスをとらうとしたが、今の体力でそれが出来る筈もなく、庵はそのまま、

立っていた。

「あ、れ？」

感覚を探つてみると、左腕を誰かが支えてくれていた。

「もう……無茶しないの。あんた、死んでもおかしくない状況なのがよ？」

庵の左隣、そこに立つのは金の短髪の少女。名前は「竜串 ルナ^{たつし}」。赤の他人の庵のために、自分を犠牲にしてくれた少女だ。今、庵はこの少女のために立っている。

「……へっ、倒れるワケには……、いかねえよな。……ん？」

庵は気づいた。いや、気づいてしまった。

（……、え、と……。俺は倒れそうになつて、それでルナに左腕をつかまれて……つてアレ？ れれれ？ ちょ、ルナさん？ そのポジションでそんな俺の腕を抱きしめると……ツ！！！ あ、当たつとる……！ イカン！！ 俺の全神経をそちらに集中 ツ！！）少女は一時、なぜ少年の顔が赤くなつたのかを考えていたが、疑問の末、ある答えにたどり着いた。

（……まさか……外傷による発熱！？）

寝起きなさい、と少女が言おつとしたその時、

「……、ん？」

体のどこかがムズムズする気がする。よく神経を集中してみると、その先には……、

「……、……ツ！？」

へ？ と思う庵の反応はもう遅く、

少女の右フックが庵の左頬に炸裂した。

7

「がつ……む、無念……！」

と、本当に武士かと思わせる言葉を遺言し、獄魔 庵はその場で崩れ落ちた。

少女は最初、頭に血が上つていたが、冷静になつてみると……、「…………つー！ ヲ、ゴメン！ ケガしてるんだつた！！ あの、その、つい……」と何度も謝りまくる。

(おイおイおイ……)「こいつら馬鹿か？ 敵が目の前にいんだぞ？」

反面呆れる中、テッドバーは一つ思つていた。

「あアあアあア……。『平和』、ねえ……」

目の前でぎやあぎやあ騒いでいる一人を見ていると、そう感じずにはいられなかつた。

彼としても平和を壊したい訳ではない。

(だけどなア、やらねーといけねんだわ)

テッドバーは血塗れたナイフを捨て、ポケットから両手一本ずつナイフを取り出し、構える。そして間合いを開く。彼のナイフの使い方は、斬つたりすることではなく、投げることにある。投げナイフというのは丁度良く間が開いていないと、敵に刺さらない。ゆえに、せめて五、六歩間を空けておかないといけない。

目の前の一人も、戦闘態勢に入つたテッドバーに気づいたらしく、それぞれの武器を構える。

(そオそオそオ。それでいいんだよ。平和なんてありえねえ。世の中な、上の奴と下の奴つて区別されて、生きていかなきやいけねエんだよ。優越、差別、怒り、嫉妬の中でなア)

デッドバーは一人を見て皮肉げに笑う。それが世界の定石だ、と言わんばかりに。

だが、そんな接戦間近な中、一人の少女が口を開いた。

「ねえ」

「あん？」

「どうしても戦わなきやいけないのかな」

「ハア？ 決まってんだろ。弱エ奴は強エ奴に潰されて、弱エ奴は強エ奴を潰そうと努力する。ンなモンだろ？ 相手を潰さなきや、こっちが潰される。そんな世界だ。いつも自分の背中を狙っている奴がたんまりいんだよ。

そんな中で『共存』なんてアホらしい意見が通ると思つてんのか。平和なんざありえねえ。そんな世界がことを知つていてなお『世の中は平和だ』なんてほざいてる奴は俺様がぶつ潰す。ムカつくんだよ

「……確かに世界は平和とは言い切れないよ。働き口も食べ物もない人もいるし、簡単な病氣で死ぬ人もいる。過剰な虐待の中で生きる子供、生まれてすぐ捨てられる赤ちゃん……。でも、だからって……ううん、だからこそ『もう平和にはならない』って決めちゃいけないよ。だから……」

「ああ、そうだな」

庵と少女は驚いてデッドバーの方を向く。対してデッドバーは威嚇的な顔ではなく、思いつめたような表情で言った。

「あアあアあア。結局はそういう話なんだよな。今は平和じやねエ、それだけだ。じゃあ今から平和にすりゃ良いんだ。だって俺様はその為に動いてんだからなア」

「？」

「……じゃあ何で人を殺すの？」

「……なアなアなア」デッドバーはどこか楽しそうな声で「よく言

うだろ？『成功に犠牲はつき物』だつてなア！！

ズバン！と轟音を立てて、『ツドバーの両腕からナイフが放た

れた。

狙いは、庵のみ。

「平和のために死ねツ！！ 獄魔 庵オオ！！」

「ツ！」

今の庵に避ける体力は無い。

「ち……、

今の少女にかばう体力と時間は無い。

潮風吹く夜の道路で、あざやかな鮮血が舞つた。

8

勝つたんだ。

俺様のナイフは粗い通りのルートを通り、敵に直撃した。

はずだつたのに、

「おイおイおイ……」

ターゲットは身動きがとれない。その護衛も相当なダメージがあつて、術も使えない状態で、たいした反応も出来ていなかつた。なのに、

「……なんで俺様が血イ吹いてんだア……？」

その場に居合わせたものなら誰でも、目を見開いただろう。

庵と少女に放たれたナイフは粉々に碎かれ、代わりに『デッドバー』の右肩が縦に切り裂かれ、血が吹き出していた。

そしてもう一つ、

「遅くなつたな」

二人の前に背を向け立つ黒い男。

それも、『デッドバー』のような黒スーツの、マフィアを連想させるものではなくて、長い黒コートをひるがえすその姿はまさに

『殺し屋』

唚然、どうとか恐縮さえしそうな庵に、少女は安堵の息を上げた。

「大丈夫、心配する必要ない。味方だから」

ふと、黒コートの男が庵の方を見た。まだ若い、二十歳ぐらいの青年だ。その身長は高く、姿勢は堂々としている。鋭いがしつかり開いた目、顔はすごく整っている。だが、何よりの特徴はそのボサボサした「赤」ではない「緋」い髪にある。風が吹くたびになびくその緋い長髪は、まるで悪魔が流血したような雰囲気を出している。異常であり不思議であり、不気味な感覚を。

男は庵と目があつた瞬間に、前を向いた。

そう言えば『デッドバー』は？ と庵も『デッドバー』の方を向く。

『デッドバー』はまだ立ち戻くしたままだつた。血を出すのが久しうりなのか、傷口を押さえることもせず、ただボーッと吹き出してくる血を眺めている。

「……おイおイおイ……何だてめ……。痛エなアオイ。てめエどいやつて周りのガード破つてきやがつた……？ ……いや、もうそんな事どうでもいいな……。てめエ……、俺様の邪魔してんじやねエぞ！ あ、あ、ア！？」

『デッドバー』の表情は逆転し、叫びに近い声が辺りをつんざく。

『デッドバー』はいつもの、敵を嘲るような表情に戻り、笑いを含ん

じがらくの沈黙が流れる。

『デッドバー』はいつもの、敵を嘲るような表情に戻り、笑いを含ん

だ声で言つた。

「……まあ、んなコトはどうでもいいか。別に何も変わらねえ。ただだ、殺す人間が一人増えただけなんだからなアー！」

9

誰が口を開く間もなく、戦闘は始まった。

先に動いたのはデッドバー。瞬時にナイフを一本取り出し、一本目を防いでも一本目があたるよつに、時間差をつけて黒コートの男に投げる。

彼のナイフは当てる場所が何処でも、当てるだけで意味がある。つけた刃傷は絶対にいえないナイフの刺さった場所は、一生その部分に刺さった時の痛みが持続する。

傷が致命的でなくとも、『痛み』を与えるだけで、人間の動きは遅くなる。そのスキに致命傷を入れることも出来るし、運がよければ痛みでショック死してくれることもある。

要は、一撃でも当てれば勝ち、という事である。

だからこそ、デッドバーは油断していた。

だからこそ、自分へ飛んでくる何かに、反応が遅れた。

めりつ、と硬いものが肉にめり込む音が体の内側で響く。

「ぎつ……があああああっ！…」

音の後に痛みが走る。左脇腹、そこに軍用ナイフが一本、粗々しく斜めに突き刺さっていた。自分がさつき投げた中の一本である。例の図式は自分には無効にしてあるものの、やはりこれだけ図太く、背のギザギザになったナイフは、普通に刺さっても激痛は避けられ

ない。

「デッドバーは震える手を、ナイフに伸ばした。引き抜く気だ。

「あがつ！ ぎぐ、げああぎいい！！」

ギザギザの加工部分が肉の纖維をブチブチと引きちぎる。そのたびに体が軽く痙攣する。

引き抜いたナイフを地面へ投げ捨て、前を向く。傷の度合いでいうと、庵よりひどい。だが、その威嚇的な表情は変わらない。

そう、例え、目の前の敵が無傷でも。

彼に絶望している暇などない。すぐに敵の観察へと意識を移す。黒コートの男の手にはワイヤーが握られていた。先には近未来を連想させるような、曲線で出来た包丁サイズのナイフが付いていて、腕の少し大きめの腕時計のようなリストアクセから伸びている。多分メジャーのような伸び縮みする仕掛けなのだろう。

武器らしいものはそれ以外には見当たらない。おおよそ、そのワイヤーに何らかの図式を附加して戦うのだろう。

(それだけ分かりやいい、十分に対応できる)

デッドバーは再び、ポケットに両手を突っ込む。そして、恐ろしい速さで片手を引き抜き、射出する。

黒コートの男は防ぐことなく、左へ飛んだ。そしてデッドバーへ向けてワイヤーを飛ばす。

「おつ……ヒ！」

デッドバーは黒コートの男から離れるように横に転がった。傷がうずくが、関係ない。もはや痛みなど雜音同然だった。

転がり際にもう片方のナイフを飛ばす。そして黒コートの男がそれについて行動している間に、起き上がり、またポケットに手を突つ込み、投げる。このサイクルをどんどん早くしていくことで、敵のスタミナを奪つてゆく。当てるだけで決定的な、一撃を入れるために。

だがそれはならなかつた。

「なあ……？」

距離をとつたはずが、目の前に黒コートの男はいた。

(いかん！　きけ……)

起き上がつてはいたものの、ナイフを構えるどころか、体勢を整えてもいいない。

デッドバーは体をひねらせ、男に上段蹴りを入れる。が、黒コートの男はそれを呼んでいたのごとく、頭を落とし、デッドバーの左脇腹　ナイフの刺さつていた場所を手刀で突く。

「ぎがああ！」

デッドバーは激痛に耐え切れず、その場で崩れ落ちる。黒コートの男が、ナイフを構える。トドメを刺す気だ。

そうはさせるか、ヒデッドバーが近くに落ちていたナイフを、彼の顔面に投げる。黒コートの男は体を反り、それを難無く避けるが、もう次のナイフが来ていた。

仕方なく後ろへ飛び、ワイヤーを構える。

「……あアあアあア。サスガだなア。『蜂』いい……」

ふらふらと起き上がるデッドバーから発せられた響きに、黒コートの男は少しだけ目を見開いた。

「よく分かつたな……」

「当たりめえだ。その髪、そのコート、その圧倒的な強さ、まさか日本に居るとはな。……『ホネット・アグゼローグ』……名前からだろ？　HORNETはズズメバチって意味だからな。……世界に恐れられている殺し屋が、何で敵にもなりかねないフリーメーソンの味方をしている？」

「お前に教えて、世界が平和になるのか？」

「ハッ。そーだな。俺に知る義務はねえや。それに、結構やられたモンだしな」

デッドバーが一步、後ずさる。それを見かねてホネットが足を進める。

「……逃がすと思っているのか」

「……一つ、教えといてやるよ。今から俺は逃げるためにある」と

をする。お前しだいで犠牲者はゼロに出来るかもなア」

何を……とホネットが言い切る前に、後ろから、「ばすん！」と爆発音が耳に入った。

そこらじゅうにあつたナイフが、次々に爆発を繰り返している。別によほど近くで受けない限り、殺傷能力はないほどのものだったので、「それが何だ」と思ったホネットはふと、あることに気が付いた。

「！…………お前…………！」

獄魔 庵だ。確か彼は脇腹に「テッドバー」のナイフを一本受けているはず。

少女はすぐに、庵の脇腹に手を伸ばした。

（分かっている。今、動けるのは私だけだから、最善を尽くしたい……！）

一瞬、頭に痛みが走った。

一瞬、腕が止まった。

ナイフが微かに赤くなつた。

それだけで、間に合わない条件を満たしてしまつた。

「くつ…………！」

だが、それより早く、誰かの手がナイフに触れた。少女に顔を確認する暇はなかつたが、男の掌だつた。ホネットだろ？

ホネットはナイフを一気に引き抜く。庵が痛みによるショック死をしないか心配だつたが、今はそれどころではない。

ホネットが引き抜いたナイフを投げ捨てよつとするが、間に合わなかつた。

バシュウッ！ とホネットの腕が弾き飛ばされる。腕や指が吹き飛ばされることはなかつたが、しばらくは使い物になりそうにない。

「ホネット！ 大丈夫！？」

「……逃げられたな。……今から忙しくなる……」

ホネットは一応テッドバーの方を見てみたが、やはりそこにはテッドバーの姿はなかった。

ピー、とヤカンの吹く音で、俺は目を覚ました。体中、寝汗でべつとり。最悪の寝覚めだ。

「……俺は……？」

ソファに寝ている、と気づくのに1秒かかった。自分の家のリビングにいる、とさらに1秒。そして、昨日の出来事で、さらにもう3秒。

「……！」

すぐさま起き上がりとしたが、背中に激痛が走り、ソファから転び落ちてしまった。

「……ッ！－！」

言葉にならない痛みを耐え、辺りを見回す。

何の模様もない壁紙、フローリング、ソファとテーブルのセット、少し大きめの液晶テレビ、何処からどう見ても、生活し慣れた自分の家だ。

「……ん？」

少し離れたキッチンの方に誰かがいる。あっちを向いて、何かを作っているようで、誰か分からぬようではあるが、その緋い長髪はあまりにも見覚えがありすぎる気がする。……というか

「何で裸エプロン！？」

実際にはパンツにエプロンなのだが、裸エプロンの殺し屋を見て、俺はそう叫ばずにはいられなかった。その破壊力は核ミサイルにも対応できる、と当時の彼は語っている。

「……ん、おっ。目、覚ましたかー。いやいや、もう一生目覚めないんじゃないからルナが心配してたぞー」

「俺の叫びはフルシカトかよ！－！」

「で、俺が『白雪姫みたいにキスしたら目覚めるかもよ？』って言つたら、ためらうことなく、何十回もぶつちゅうしてたぞー」

「マジですか！…」

「嘘だけど？」

「てめえブツ殺す！ 人の純情をもてあそ……ぐはっ！ 傷口がつ

！」

「ほらほら、無理に立ち上がるうつすんな。傷口は完全に塞がつてないんだぞー」

のたうつ庵を見て、裸エプロンの殺し屋は駆け寄つて、丁寧にソファに寝かせてくれた。ちくしょう、この右手が動けば。

「ああ、ちなみにパンツ一丁なのは、着替えがないからだ」

「ああ、そうですか……」

「お前は一体何者だ？」

男二人でのムサイ食卓での第一声はそれだった。

「はあ？ 僕のセリフだろ？ それ。あんたは一体、何者なんだ」

庵がそう言い返すと、ホネットはラーメンをすすり、口を開いた。
「順を追つて説明しようか。まずは……、俺たちの組織について」

「あ、えーとフリー……」

「『絶対正義組織』な。世界平和と人類愛を掲げる、世界規模の平和主義団体だ。世界各地に『グランド・ロッジ』と呼ばれる支部を配置してて、本部は……言えないが」

「平和……。何か引っかかるような……」

「…………ん？ 待て。お前確かに殺し屋だろ？ 平和を掲げてる組織にとつて、人殺しつて……」

「違うな」

ホネットはきつぱりと答えた。すでにラーメンは食べ終えている。だが、それより目が奪われるのは、その金の眼光。ただ、まじまじと見つめられているだけなのに、見えないものに押しつぶされそうになる。

ホネットは押しつぶすような声で続けた。

「お前ら一般人は『殺人』つてのが、人間の一番の罪だと思つてんだろうな。実際、俺もそうだと思う。見方の違いだ。……そうだな、『走れメロス』つて知つてるか？ その物語の中で、主人公メロスが、王様を殺そうとするんだ。なぜ殺そうとしたか分かるか？ その王様がたくさんの人間を殺したからだよ」

庵は、何も言えない。

「『殺人』つてのが一番の罪なら、それを犯した人間は、どうなる？ ……たいてい死刑だろ？ 分かるか。俺やルナのような立場の人間は、死刑を執行する立場の人間にあるんだ」

「…………つ、」

突きつけられた事実。人殺しを正当化する、正義。

「でも…………！ だけど…………」

その先が言えない。いや、言葉がない。

ただ必死に言葉を探す庵に、ホネットは優しく言った。

「受け入れられないのは分かる。今だつてルナはそうだしな」

「…………あ」

『ま、それが殺し屋とかのマニユアルなんだけど、私は殺し屋でもないしね。私の場合は人質は放つとけないし、あんたも放つとけない。できるだけ死人はゼロにしたいの』

庵はあのときの少女の言葉を思い出す。彼女には彼女なりの思いがあつた。たとえどんな救いようのない人間でも、できるだけ『殺す』ことはしたくなかった。いや、しなかつた。できるだけ、他に道を拓こうとしていた。

ホネットの言う『立場』の人間が全て、人殺しを正当化しているわけではない、といふことが分かつただけでも、庵は安心できた。『話を戻すぞ』ホネットが言う「とは言つても、『絶対正義組織』の人間が全て、俺みたいな事をしているんじやねーからな。どっちかつづーと、極少数人だ。大半の『団員』はお前みたいな平和ボケした奴等さ。ちなみに、ルナの羽根みたいな常識外れな能力持つて

るのはもつと少ない。五十万人に一人、ぐらいか

「……そういえば、あいつやデッドバーが『まどー』とか『たしん
とー』とか言ってたけど……それ、何?」

「んー、とホネットが首をかしげながら、ラーメンの器を台所に持
つていく。

「そこが一番、説明しにくいんだよな……」

「はあ? 順を追つて話すつて言つたじょんかよ。説明しろよ!」

「……よし!」

ビシイツ、とホネットが庵を指差す。

「めんどいから、ルナに訊け!!」

2

「……なあ、俺が悪いのか?」

「……じゃあ自分は悪くないと?」

「イヤ、そういうことじゃなくて……」

庵はどうしようもないこの雰囲気をどうにかしようと必死だ。や
れでも田の前の少女は、今すぐのでも怒りが爆発できますよ、と言
わんばかりである。

「……とこいつが、ずーっとこのポジションでいいのでしょうか?」

「いい訳ないでしょツ!! はやくどつか行け!!」

「ハイツ!! すいませんでしたー!!」

その言葉を捨て台詞に、庵はその場から逃げるよつと立ち去る。

「ちくしょうつ!! ホネットのヤロー!!」

事の始まりはホネットだつた。

「俺、今から仕事だから。残りは全・部・ルナに訊いてー。あ、大丈夫、人殺しの仕事じゃねーから」

と言われ、庵は少女を探すことになったのだが、その前にこの寝汗ベットベトの体をどうにかせねばと思い、風呂場のドアを開けたが最後。

「女の子が先取りしてましたー」

「……誰に説明してんの？」

……そして、その場から追いで出され、今の状況に陥る、と言ひ訳である。

庵は廊下の壁に頭をつけ、うな垂れる。

「……やべえって絶対……！　殺される、ぜってー殺される」

今まで何の変哲もない人生だったなあ、もつとハシヤいでれば良かった、と16歳にして自分の人生を振り返つてみると。

と、その時、誰かが庵の肩を叩いた。

「…………ッ！！！」

全身に緊張が走る。蛇に睨まれた蛙の気持ちが分かつた気がする。庵は、ホラー映画の振り返るシーンのように、ゆっくり、ゆっくりと恐怖を味わうように振り返る。

そこには案の定、嵐の前の静けさのように沈黙し、顔を伏せている金髪の少女がいた。

沈黙。

庵的には怒り飛ばしてくれた方がよかつたのだが、目の前の少女はそれはしない。ただこれから起きるであろう恐怖を庵に想像させている、というカンジだ。

「……、」

「…………あのー、」

「動機は？」

「はっ！　えーと、出来心で……じゃない……お前を探そうと思つたんだけど、その前にシャワーを浴びとこいつと思つたら……」

「……そう。で、何で私を探してたの？」

「ホネットに組織とかの説明を聞いてて、あいつ、途中からめんどくさいとか言って」

「私に振ったと」

「イエス」

すると少女は、そ、とだけ言つてリビングに向かつ。

「ゆ、許してくれんのか？」

「別に悪気があつたわけじゃないんだし、怒る必要はないよ」
その言葉に、庵は心底安心した。意外と優しい奴なのかな、とこの少女を鬼みみたいに思つていた自分を恥じる。

リビングに付くと、少女はまだ洗われていらないラーメンを器を見て「お昼御飯、インスタントラーメンだつたの？ 怪我だつて完全に治つてないんだから、もつと栄養のあるものを摂らないと。冷蔵庫、見ていい？」

「ん？ ああ、いいけど、でも……」

少女は冷蔵庫を開けると絶句した。

「……グロいお酒以外、何も入つてないじゃん」

「まあ、俺も普段、コンビニ弁当で済ませてるし。後グロいのは親父のお土産だ」

「やっぱ科学者つて変わってるね……」

「拉致されてもへらへらして帰つてくるし」

「うん、まあ、とにかく」

バタン、と冷蔵庫を閉めると少女は言つた。

「材料がないと料理できないから、買出しに行つてくれる」

「あつ、俺も行く」

「だ、か、ら、ケガが完治してないんだつて」

「大丈夫、大丈夫。それに、お前も結構やられてたじゃん」「あれはただの脳震盪、あのあとすぐに直つたよ」

「うー」

「うー、じゃない」

その時インター ホンが鳴った。刹那、少女が庵の頭をつかみ、床に押し付けた。多分、「敵の襲撃だった場合」に備えての行動なのだろうが、それでも顔面を床に本気で叩きつけなくてもいいと思つ。鼻血が出そうなくらい痛いんですが。

しん、と静まり返るリビング。

「……俺が見てく

「私が見てくる。そこで待つて」

少女はささー、と手馴れた足取りで玄関へ向かう。向こうからは「はいー」とか「どうぞー」とか聞こえてくる。意外に、ちゃんと接待しているようだ。

少しして、少女がリビングに戻ってきて、お友達、と玄関を指差して言った。

「友達？ 海老村かな」

「さあ。待ってるよ、早く

「ん、ああ」

そういうえば今日から「ゴールデンウイークだもんなー、とか思いつつ、庵が玄関に行くと、そこには、少し予想外な人がいた。

「瑠璃華？ そしてなぜに、ゴキゲンナナメな顔？」

何故か庵を睨んでくるワンピースにブラウス姿のツインテールの少女は、少し顔を赤くして口を開いた。

「…………どうでもいいけど、さつきの子誰？ ……どうでもいいけど、さつきの子誰！？ どうでもいいけど、さつきの子誰！…」

「なぜ繰り返す！？」

「いいから！ サツキの子誰！？」

「え？ イヤ別に……、ただの知り合い？」

それを言つた時、庵の背中に何か殺氣のようなものが突き刺さつた。ええ！？ なんで！？ と心の中で絶叫する庵だが、顔には出さないでおぐ。

「へえ……そなんだ……。じゃあ、何でこんな朝からアンタの家にいる訳？」

「え！？ え～とですねーーー！ つてか今、朝なのーー？」

「7時だけど」

「7時！？」

確かに、男子高校生の家に朝っぱらから女の子がいれば不自然だと、言づかなんかいろいろと心配だ。

庵はベストアンサーを探すが一向に見つからない。しかも時間がたつほどに怪しさは倍増していく。

「ねえ！ 一体なんだなのよ！？」

「……実に言いにくのことなんだけどな、実は生き別れた妹が昨日帰ってきた」

「嘘つくなっ！！！」

そう言われれば、瑠璃華は庵の昔からの幼馴染みなので、その手の嘘は通じない。と言づかただ庵は話を逸らしたいだけである。

「なあ……、もう、どうでもよくね？」

「いいと思つてんの、アンタ」

「つてか、お前は何しに來たんだよ。」「んな朝から」

「つ、と何故か瑠璃華は顔をひきつらせて、視線を逸らす。そして、唇を尖らせて、パクパクと動かしている。

「いやいや、何か用があつて來たんだろ？」

「……、あの今日、休み、だし……。え、昨日もなんだかんだで何も、出来なかつたし……だから……」

「だから？」

「ツー！ もきよつ、今日遊ぼうかなーーー！ つてーーー！」

いきなり声を張り上げられたので、庵は少し後ずさりしてしまう。

「え、いや、……別にいいけど」

「あ、え？ そうー？ え～とじやあ最初、何処行くーーー？」

「どーに、……つて、決めてなかつたのかよ」

「し、仕方ないでしょ！ 今日あんたが遊んでくれるかも分かんなかったのに……！」

それを言つたとたんに、瑠璃華は俯いてしまつた。よほど庵が遊

んでくれるか心配だつたのか。

(……へえ、結構可愛いト「あんじゅん。いつもは暴力的なんですけどね）

「ああ、それなら大丈夫だぞ。俺、ほほいつもフリーだから」

「……え、そうなの？ ジャア、明日も遊んでいい？」

「もち。んで何処行く？ やっぱゲーセン？ でも俺、財布がピンチなんだよなー」

「う、うん！ でも私は洋服を買いにいきたいなー」

「あ、じゃあ最近、隣町に出来たあの店に」

平和だ。

昨日、いろいろあつたりしたけど、ホネットはすごい強かつたし、親父もすぐ助け出してくれるだろう。

そう、庵はこっち側の人間なのだ。

あんな、意味の分からない不思議な力を駆使して戦い合つような、そんな世界には不釣合いな人間なのだ。きっと、こつやつて適当に友達と喋つて、遊んで、また明日つて言つて家に帰つて、風呂に入つて飯食つて、明日のために寝て……。そんな日々が似合つ、平和な人間なのだ。そう、「平和」な世界の住民なのだ。だから、自分が平和に過ごして何が悪い。だつて

(どうせ俺がでしゃばつたところで、誰も救えない)

逆に、誰かを傷つけてしまう。あの時は言わなかつたが、ホネットは多分左利きではないと思う。それなのに、震える手で箸を握つていたのは恐らく、昨日庵を助けた時に右手にダメージを負つたからだろう。あの少女だって、自分と関わらなければ、あんな怪我をしないで済んだ。

全て自分が悪いのか。

自分の所為で、自分を護るうつとしてくれる人達が傷ついて。それなのに誰も自分ことを責めなくて。

(……はは、どうしてこんなに考えなくちゃいけないのかなあ……)

こんなに抱え込むぐらいなら、そ、関わりたくない。

こんなことなら、いつそ誰かに任せたい。

自分が何かしたところで、誰も救えないのなら、いつそ、何も知らないでいよう。何も考えないでいよう。誰かに任せて

いつその事、平和な世界にいよう。

「 よし、じゃあ行」

そういうて庵が靴を履こうとしたとき、何かが庵の腕を掴む。廊下の方を見ると、そこには金髪の少女がいた。そういうえば外出禁止とか言われたようななんとか、と庵が構えていると、まるで予想範囲を超えた　　要は予想外な言葉が発せられた。

「 買い物、付き合ってくれるんでしょう？」

……え？

「と、言うか、この人は何なの？ 不用意に他人と接触しない必要があるんだけど。この人があんたに危害を加える可能性だってあるんだから」

「でも、友達だし……」

瞬間、少女がすごい音を立てて、足を床に叩きつける。その顔は怒りなのか、少し赤い。

「いいから行くのッ！－！」

「はい－！」

「……って、ちょ、ちょっと待ちなさいよ……庵は私と遊ぶんだから－！」

と、さつきからポカンと一人を眺めていた瑠璃華が我に返つて、話しに割り込んできた。

「部外者は黙つてくれる？ あなたはこいつの置かれた立場を理

解していない。出来れば帰つてくれるかな

「ぶ、部外者ですつて！？ 立場とか関係ないでしょ！？ 大体ア
ンタは一体何なのよ！？」

「何つて、絶対正義組織フリーメーソンのメーソン『竜串ルナ』よ。
わかつたら帰つて。こいつは私と買い物に行く約束があるんだから」
約束はしてませんし、そもそもあんた付いてくんなつて言つたじ
やないですか。つてか、そのフリーメーソンての、堂々と公言して
いいんですか？」と庵は思う。確かに、先に遊びに行く、つて言つ
たのは瑠璃華の方なのだが、この少女はそんなこ
とはどうでもいいのだろう。

「あーつも！ 分かんない！ とにかく、私が庵と遊びに行くんだ
から！」

「私は遊ぶんじゃない！ 食料を調達しに行くの！…」

庵が少しだけ楽しそうに傍観しているこの戦いも、どんどんヒー
トアップしていき、ついにはその傍観者にまでその矛先は向けられ
た。

「「あんたはどいつもなの！？」

「えつ？」

「だから、あたしと遊ぶか

「私と買い物に行くのか」

どっちなの！？ と二人が庵に詰め寄る。恐らく、一人ともどつ
ちかを選んで欲しい訳であるのだが、どこまでも平和を味わつてい
たい庵としては、この選択でどちらかを選ぶことは出来ないので、
だがしかしどちらかを選ばなければ何か、死ぬような気がした。

「……じゃあ、俺は……」

二人は息を飲む。一人の少年は冷や汗をたらし、生つばを飲み込
に、殺されないことを祈つて、

「……ツ！ 逃げます！…」

え、と二人が驚くヒマもなく、いおは速攻でドアを開け、青い空
へと全力疾走し始めた。

その後、体格の割に恐ろしく足が速い金髪の少女に庵が取り押さえられたのは言うまでもない。

信号のない道路、芝生のある広い庭を持つ家、広い公園には噴水もあるが、今はまだ出でていない。

ここは日本ではない。世界一の経済力を持ち、世界一外国との接觸が多い国、アメリカだ。

その都市部のニューヨーク、そのビル街の下、デッドバー・リングは立っていた。

辺りはゴールデンウィークと言う事も忘れているようにいそいそと歩く通勤者でいっぱいだ。車道なら何も込んでいないのだが、歩道が多い。歩行者どころか最近は自転車で通勤する人が増えてきた。デッドバーとしても、人の多い場所は好ましくない。バスを待っているのだ。いつもなら車で移動するのだが、彼は昨日、日本で夕に相当なダメージを負つていて、とても運転できる状態ではない。それも、会社に行くまでの話、なのだ。

「……あああア、いつてえな……、マルバスの治療も俺のカースがそつち系じやねえからまともに出来てねえ。つつか、バスおせーんだよ。今何時だア？」

デッドバーが時計を探そぐと顔を上げると、ちょづびCMを流しているビルのディスプレイの隅のほうに時計がついていた。

午前五時十分。簡単に計算すると、日本は八時ぐらいだろうか。（……つたく、面倒事になる前に「獄魔庵」は消しておきたかったんだけどなア。ま、あの傷だったら死んでるだろ。多分、な）

そんなことを考えているうちにバスが来た。郊外行きのバスなどで、少しボロいスクールバスサイズのものだ。その郊外の工場地帯、そこの「ノイズ」と言う電気会社の工場に彼は用がある。

降りてくる人間は少なかつた。確かに、普通郊外から都市部への

通勤者程度しかここ、ニューヨークのビル街に用のある人間はいないだろう。まあ、ルートが逆でも乗客は少ないのだが。

乗客はデッドバーだけだった。こっちの方が落ち着く、とデッドバーはドアに一番近い席に座り、歩道の通勤者たちを見る。

「ゴールデンウイーク、つーのに皆さん忙しいのな」

「それを言う、兄ちゃんも忙しいんじゃないのかい？」

デッドバーは独り言のつもりだったが、斜め前にいる運転手に聞こえたらしく、返事を返してきた。

「にしても兄ちゃん、スーツなんか着て、郊外に何の用だい？」

声の枯れた、定年も近いような男性の老人は、デッドバー・リングと言う人間を知らない。だからこう淡々と喋れるのだ。

デッドバー・リング。表向きは大手の電気会社「ノイズ」の会社員、だが裏向きはマフィアの中では最大規模を誇る「悪魔教団侵略^{ノイズ}」の重鎮。いまはその表の顔でいるつもりなのだが、普通ではありえないものが彼を纏っていた。

魔力。

その言葉を聞いたらまず「魔法を使う時に必要な力」と思うだろうが、今のそれは違う。文字通り、魔の力だ。触れれば皮膚が裂け、肉が弾け、骨が粉々になり、すれば呼吸がおかしくなり、脳が犯されるような、そんな力。

それだけが、裏の顔だった。

別にこんな老人のために放っている訳ではない。いや、実際に放つているのはデッドバーではない。

「そうだな」デッドバーは窓越しに朝空を見て、「焚きつけた火にはもつと燃えてもらわねーといけねーからな」

その顔は笑っているのか。睨んでいたのか。

電気会社「ノイズ」と言えば、その爆発的な売上が国内に収まるず、ヨーロッパやアジアなどにチエーン会社をショットガンのように撃ち出した事で有名だ。ほぼ全ての電気製品に手をかけていて、しかもその売上は他社とは一桁や二桁違う、言つなれば超大手の電器メーカーだ。

だが、この会社には一般人は当然、親密な会社も、さらには国の人間も大半は知らない「もう一つの顔」がある。

『ノイズ 魔教団侵略雜音』

悪魔学を中心として魔女学、墮天学と様々な『魔力』を使用する凶式『魔法』を使う戦闘集団。ほとんど全てのテロ、軍事衝突は裏で彼らの力が働いている。それも、全て悪い方向にしているのではなく、ある程度の『限度』をつけるのも彼らの仕事とも言える。

トラブルの原因をよく作ることから『トラブルを起こす者達』と言われている。『平和を守ろう団体』とは対極の存在。実際に両者は対立していく、しおりちゅう衝突している。

そう、『いたずら者』は『正義の味方』とは対極の存在。だが、デッドバーはそう考えてはいない。なぜなら、彼もまた平和を望んでいるからだ。

ただ、やり方が違うだけ。

元々、『トリックスター』と言う者たちは、世の中に混乱をもたらし、そして人間たち、神話上では神々たちに、互いを信じさせ、社会関係を再確認させる役回りの者たちだ。

トラブルを起こした所為で仲間はずれにされても、遠くから人間や神々の世が平和になつて行くのを笑つて眺めていただろう。そう、たとえ自分は仲間はずれでも。

デッドバーはそれになりたい。

自分がその輪に入れなくても、平和を創りたい。

いくら何千何万の犠牲を出したとしても、その先の未来で誰も犠

牲のない世界が出来上がるることを祈りながら、

そう、未来の子供達のためにも、

未来の人々がこの役回りにならぬよう、「この代ですべての混乱が終わるよう」に、

「戦争を起さず」

4

庵はちょっとレトロな電車の中にいる。

あの後、最終的に「皆で一緒に買い物に行きましょー！」と言つ庵の提案により、その場は収まつたのだが、よく考えれば「ゴールデンウイークで商店街は休みだし、年中無休のデパートは昨日半壊したしで、どうしようか？」と一人に聞いてみたところ、

「あんたが言つたんだから、責任とつて考えろ。」

と言う事だつたので、病み上がりの体を引きずつて、隣町のショッピングセンターに行くことにしたのだ。

だが、一難去つてまた一難。

「ちょ、押してこないでよ！」

「そつちが押してる。後、仮に私が押していくても私が詰める必要はない。あなたが立てばいい」

「なな、何ですって！？　あなたが立ちなさいよ！　何で前の席が空いているのに、そこに座らないのよ！？」

「そう言つなら、あなたが座ればいい。私も一人用の席に二人で座るのは窮屈だと思つていたし」

「あーっ！　何でそう上から田線なの！？　あなたが座りなさいよ！」

そう、何故か庵の座つている一人用の席には庵を挟むように二人

の少女が座っている。正直狭い。

隣の人達は、どっちが空いている前の席に座るかで言い争つていて気づかないのだが、庵はすごく恥ずかしかった。金髪の少女は文句なしの美少女で、瑠璃華も可愛い方に入るので、もちろんそんな女の子たちに囲まれている庵は、通り過ぎる男子には本当に殺氣の籠つた目で睨まれるし、中年男性からはチラ見の連續（見られるのは一人の少女のみ）だし、女子からは小言で「すごーい」とか「何？今、二股がバレたとこ？」とか言われるしで、もうせんざんである。しかも、恋愛経験乏しい庵にとっては、この状況は刺激が強すぎる。

「いいから、あなたが座」

「だーーーっ！！俺が座る！！」

庵は立ち上がり、70センチほどの距離をすかずかと歩いていく。その背中を一人の少女は口を開いたまま眺めていた。

「わーっ、この服イイかも！ どう庵ー？」

「え？ いや、俺に聞かれてもなー。でも、いいんじゃねーの？」

庵達は今、まだ真新しいショッピングセンターの中にいる。ここは一階の女子向けの小奇麗にキラキラした服屋だ。このショッピングセンター、ボロボロの工場を取り壊して出来たもので、なかなか広く、一ヶ月前に出来たのでなかなか時代に沿つたものが揃っている。だから、普通に客も多く、今日からの一週間にかけては「ゴールデンウイークなので、熱氣あふれるワールドカップの観客席のよう込んでいる。……と言つことは、庵とこの二人の美少女達は、ここまで来るまでにもたくさん的人に見られた訳であつて、

(……俺は何にもしていないのに、何で同年代の男子共から睨まれたり、舌打ちされなきゃならないのですかーーー？)

「んー……、あー！ この服もイイ！ 買おつかなー」

一人だけ自分の世界に入つて、ウインドウショッピングを続ける女子高生を脇に、少女が庵に話しかけた。

「……そう言えば、まだ説明してなかつたね。いろいろと」

「ん？ ああ」

「このことを知れば、あなたは巻き込まれることになる。この事件だけでなく、これから起ることにも。それでも、こちら側の世界に深入りできるの？」

庵は少し戸惑う。自分は平和な世界にいたい。こういう『死と隣り合わせ』なものに関わるのはこれつきりにしたい。

だが、それ以上にこの少女の役に立ちたい、と言つ気持ちが庵にある。だから、知る必要がある。もしかしたら、それは好奇心から来るものかもしれない。

庵は、一息ついて、しつかり頷いた。

そして、物語は始まる。

「この世にはいろんな『人をこえた力』があつて大きく分けると、神の御業『神術』と魔の法術『魔術』。神術って言うのは既に魂になつてゐる神や、天界ちからにいる神や天使などとリンクして、その力の一部を使わせてもらう能力のことで、これが『人を超えた力』の王道。全ての人が一人ひとりそれぞれの神や天使とリンクできる可能性を持つて生まれてくるんだけど、一生の内にその能力が覚醒する人は少ない。……これが、『絶対正義組織』の執行部隊『執行人』のほとんどが使う能力よ」

「……あの羽根も、その神術つてやつなのか？」

「そう、北欧神話の戦乙女『ヴァルキュリア』の『無重鎧ロセンスティコレの羽飾り』、私ぴつたりの図式よ」

戦乙女、と言う響きに『本当にぴつたりだ』と庵は思つたが、こ^こはあえて言わないでおく。

「次に、『魔術』ね。主として悪魔や墮天使、あと鬼も入るかな。とにかくダークなイメージがあるものは大体こっちのものだと考えていい。魔術はそういう者達を呼び出し、契約して、自分の体と結びつけるの。取り込む、つて言った方が分かりやすいかも。で、その能力を使う、つて言うものなんだけど、この魔術にはメリットとデメリットがあるの。メリットとしては、少しの知識と意志があれば、誰でもその能力を使うことができるの」

「はあ？　じゃあ皆やってんじゃん」

「最後まで聞け。それが魔術的魅力的な部分。次にデメリットの方なんだけど、寿命が縮む、とまでは言わないけど、常に死と隣り合わせになるの。これが魔術を誰でもやつていかない理由の一つね。あと『仏法』つて言う派があるけど、そつちは今回のことに関係ないかな。とにかくこれが、数多くの犯罪者や殺し屋、一番大きいのでは『悪魔教団侵略雑音』が使つているものよ」

「『ノイズ』……、ん？　あっ！　なあ、ノイズつて確か電器会社

じゃなかつたつけ？」

「そうだけど、あくまでそれは表向きの顔。裏では人殺しも平氣でやれるテロ組織よ」

テロ。庵は昨日のことを思い出す。『ツッドバー・リング』。人を殺しても何も感じない。罪悪感がなければ、満足感や優越感もない、まるで腕に虫がいたから叩き殺した、と言つているような、そこに何の感情もない行動。そんなものに武器を持たせれば、その先には殺戮しかないのは当たり前だ。

「……、あ、そういうばさ、『まどー』とか『たしんとー』とかつて何？」

「『魔術』『神術』は能力を発動する設計図みたいなもの。図式つて呼ばれてる。実際に能力が具象するのを『魔法』『神法』、それを発現するために能力に組み込む燃料みたいなものを『魔力』^{カース}『神力』^マ、『魔の思想・生き方』を『魔道』、『神の教え・そのものの道』を『神道』^{シンドウ}、また北欧神話や日本の多神教のように、この世には『八百万の神』^{やおよろず}がいる、っていう思想を『多神道』。これら辺のことは少し難しいかも知れないから、無理に理解する必要はないかな」

「つうむ……、」

要は理科的に『道』と言つ考え方を元に、『術』と言つ仮説を立て『力』と言つ素材を使って実験してみたところ、『法』と言つ現象が起きました。……ということなんだろうか。

「あとは『絶対正義組織』^{フリーメイソン}と『悪魔教団侵略雑音』^{ノイズ}、この二つの組織の関係だけ、分かるでしょ？ 力を欲するは何かに振るうため、『悪魔教団侵略雑音』^{わたしたち}は破壊活動をするため、そして『絶対正義組織』の『執行人』はそれを止めるため、力の使い方が違うの。正義の味方と悪の組織が戦うのと一緒ね」

庵は考えていた。自分のような一般人が知らない世界では、こんなにもの人間がそれぞれの意志で命懸けの戦いをしている。人を殺すため、人生かすため、人を傷つけるため、人を護るため、

では、自分は？

全く知らない瑠璃華や海老村ならまだしも、その世界に触れただけでなく一度自分を原因にその戦いが行われた庵は？

誰かがやつてくれるとか、自分は平和な世界について当然だとか、自分は何もできないとか、そんな言い訳を並べて、自分はその世界と無関係と決めつけ、拳句の果てにはそれに触れたことさえもりセツトしようとする。

ただ、自分にはそれに関わって生きていける『強さ』がないから。あの少女のような、全くの他人のために命懸けで戦える『強さ』がないから。

この少女を護ると言いながら、護り切ることができなかつた。だから、もう自分は何も護れない。

それで、良いのか？

自分に対処できない問題にぶち当たつて、何もできないから田を逸らしだだけではないか。

あの時、恐れずデパートに入つていつたような、軽い正義感じやどつもできないなら、もう『不可能』なのか。

あの時、命懸けで戦う少女の元へ戻った罪悪感だけでは、関わることはできないのか。

違う。

力がなくとも、役に立たなくても庵は少女を護りたい。その想いだけは貫き通したい。

だが、それをするにはどうすればいいのか、それが分からぬ。「で、あんたのことだけ……、」

「ん？ あ、名前でいいよ。眞面目に話すし」

「慣れないからいい」

スッパリと言われた。この少女との関係がここまでだったことに、ちょっと庵はショックを受ける。だが、ここでヘコたれてはいけない

い。

「う……、まあ、俺はルナって呼ぶけど……、いい?」

「……、うん」

それよりも、トルナが話題を戻す。

「あのナイフを背中に受けたでしょ? 正直に言つけど、あれは確実に致命傷だつた。なのにあなたは死なずに、さらに半日で体が動かせる程度まで治した。あいつの言つ通りなら『癒えることのない傷』を」

「……、ドウイウコト?」

「あんたが神道とリンクし始めてるって事、多分魔術の付加効果を打ち消すようなモノだと思うけど」

「へー! 僕すごいじゃん! あ、確かに俺さ、昔からケガの治りが早いんだよね」

その言葉にルナの眉がピクリ、と動く。

(……どういうこと? ただ回復能力が早いだけじゃ、あの傷は治らないはずだけど……、まさか……、)

「……どした?」「

ルナが険しい顔をしているのを見て、庵は思わず喋りかけた。

「……いや、なんでも。あ、もう一つ話すことがあつたわね。あんたのお父さんについて」ルナは一度言葉を切つて「私も詳しい」とまでは知られていらないんだけど、あんたのお父さんの研究は、未完成ながら『人を絶対の存在にする研究』と呼ばれてるらしくて、フリー・メーツンの方で研究されたの。その技術を軍事利用するため、『悪魔教団侵略^{ノイズ}雑音』を中心^{ハントメーツン}に様々な組織から拉致されたんだけど、私たち『執行人』が拷問にかける暇もないほど短時間で助け出してきたの

「あー……、」

庵は思い出す。竜串ルナ、ホネット・アグゼローグ、この二人の『執行人』の強さを。

あの圧倒的な実力は、元々持ち合っていたものではないだろう。

きっと、自分のような平和ボケした一般人には想像できないような、そんな過去があつてこそその強さなのかもしれない。

確かに、そんな人達が集まつた部隊なら、敵の組織が何をしてこようかと笑顔で対応できそうである。

「でも今は違う。いつもの『ノイズ』なら、一寸ほど現地の小アジトに置いとくんだけど、今回は拉致してすぐに本部に運んだ。小アジトなら潰しても助け出せるけど、本部に移されたらおおびらに動けないから、様子を伺うしかない。しかも、世界各地の『執行人』達に刺客を送ることで足止めをしてきている。今は、相手の出方を見るしかないの」

「はあ……、そつか。でも、親父が殺されることはないんだろ?」
「うん、トルナが頷く。

「『人を絶対の存在にする研究』は、あんたのお父さんだけが研究者で、その理屈は那人だけしか理解できないらしいの。だから、その研究で何を使うか分からない。その技術欲しさなら、その体を五体不満足にすることもできないよ」

だから時間はあるの、トルナは付け加える。

庵は天窓から雲の多い空を見る。今も、自分の父親は敵しかいないうな場所で生きているのか。それなのに、自分はこう平和にのうのうとしていて良いのだろうか。ルナは焦る必要はない、と言つていたが何かドクドクとした違和感が止まらない。

心配、とは違うこの不安な感覚。

「戦争を起こす、……か。大胆なことを言つな、お前は」

工場の地下の暗闇の中、男は言つ。テッドバーは答える。

「あア、『フリー・メイソン絶対正義組織』なんざ甘エ組織に平和なんて作れっこね

え。『悪魔教団侵略福音』と『絶対正義組織』の全面戦争だ。俺らが平和を作る」

男はデッドバーをジロリ、と見る。そして険しい口調で言った。

「全面戦争、といつ」とはそれなりの犠牲が出……」

「カリカリすんなよ、俺としても犠牲を出すことを好んでいる訳じやねエ」

だから、と付け加える。

「あの実験が、必要なんだよな」

その言葉に、男は歯噛みする。できるだけ、デッドバーには分からぬように、とても小さく。

そして話を進める。

「彼の意思はどうなんだ」

「協力する、とよ。そのための犠牲も承諾してな。まあ、全世界を巻き込んだ戦争で出る犠牲に比べりや、たかがそれだけ。つーハナシだろ」

男はまた歯噛みする。そして口を開きかけたが、その前にデッドバーの声が耳に入る。

「んで、お前は腹ア括ったのかよ」

「……、平和の犠牲が、それだけで済むなら」

『平和の犠牲』、と聞けば、それはいけない、と思う人が大半だろう。だが、『犠牲』なしで達成できるほど、『平和』とは簡単なものではない。例えるなら、感染病のワクチン作成のようなものだ。今までに大量の血が流れ、命が失われた代償として、そのウイルスを根絶することができる。貧富や差別、暴力などの『混乱』を『戦争』を通して『犠牲』を糧に初めて、『平和』を作ることができる。

彼らにできることはその『代償』を最低限に抑えることだけだ。

今度は男が先に口を開いた。

「二ゴーリークから日本まで、どれくらいかかる?」

「あア あア あア、車でアメリカ横断して、船で太平洋横断すんだから、早くても半日はかかるじゃねえの？ あと、俺らのことを探るために、アメリカに来てる『ハントメーン執行人』がいるらしいからなア、そっちも片付けねーと」

「……、どれくらいかかる？」

ハツ、とデッドバーは鼻で笑う。

「出発の準備しどけ。あア あア あア、十分もかかるねエよ」

その言葉を残して、デッドバーはそこから消えた。しばらくして、男が呟く。

「……、戦争が、始まろうとしている」

「……どうしたの？」

「放つとけばいい」

「いや、それはいかんでしょう」

ぞろぞろと人が流れていく通路を見て、庵はけっこつ重いタメ息を漏らした。

ついさっきまで、瑠璃華のウインドウショッピングを終え、「もうすぐ昼だから、じっかでメシ食おう」という事でそこのらをウロウロしていた庵達御一行だったのだが、

「……この場合、じっちは迷子なんだろうか」

庵が少し投げやりに咳くと、さあ、トルナが返事を返してきた。
庵がまた、タメ息をつく。

瑠璃華がいない、そう気づいたのはあの店にけっこつ離れたところにあるエレベーターに乗った時だ。その後、来た道をたどりながら探していたのだが、人が多すぎて全然見つからず、店の前まで戻ってしまった。という話だ。

もう一度探そう、と思った庵だが、この川の流れのようにな絶えず

溢れている人の群れを前に、思わずまたタメ息がこぼれる。

「何でこんな人多いんだよ～」

「ゴールデンウイークだし」

「はあ～～、……あつ！ そうだケータイ！！」

その手があつた！ と庵はなかなか使い込んだケータイをポケットから取り出し、画面を覗く。

「つて圈外かいっ！！」

がはつ、と崩れ落ちる庵。それを見て、ルナは少々哀れみを込めて、優しい口調で言った。

「ここに人が多すぎるんじゃない？ 屋内つて事もあるけど。もうすぐお昼だし、少しは人が減るだろ？ から、その時に連絡を入れて合流した方がいいと思う。今は、ここを動かない必要がある」

「そつか……、じゃあここで時間潰すかー、つてここ主に女性服しか売つてないからなー」

「それじゃ、私は私でその辺にいるから

「はいは～い」

軽くてをぶらぶらさせて、ルナを見送った庵は周りを見渡す。他にいける店があるのかを探してみたが、ここらはスポーツ屋ぐらいしか男性服を売っている店はない。少し行けばメンズもあるのだが、

「……」で更にルナとはぐれてしまつと本末転倒だ、と思つたのか諦めた。

「……、は〜」

軽くタメ息。基本的に庵はヒマなのは並以上に嫌いな人なので、ここで何かしておきたい、というのが彼の望みだ。

「……、ん~……、んん~。うう~……、うう……、うううううう~」

店の中でなんか同じ所をぐるぐる回り続ける庵。このままでは黒魔術の準備とか始めてしまいそうな勢いでヒマだ。

そんなかんなで店の奥まで徘徊しきつた庵は、退屈のあまり壁にもたれた。

(……、そういうルナは何してんだろ)

向かつて行つた方向的には店の外なのだが、あっちもそつ遠くへは行つていない可能性も高い。案外近くにいるかもしれない、と庵は起き上がって歩き出した。

もうちよいで昼なのに未だに人は多いし、あの身長だから見つかりにくいだろうと思つたが、けつこう早く見つかつた。というか、その綺麗な金髪が目立ちすぎた。

「あ……、」

さつきの店から少し行つたところ、そこにあるアクセサリーショップ。カウンターの手前のコーナーの、ネックレスを中心にしていて

あるやう」の前に、ただじつと立っていた。

よく見ると手に一つ、ネックレスを持つている。お金が足りないのかないのか、もじもじと手を動かしていて、口からには呟づいていない。

「それ、欲しいのか？」

「はあやあつー?」

まさか近くにいると思わなかつたのか、イメージの翻訳はずつと女の子らしい悲鳴を上げてルナは「いつちを向く。

「べつ、べべ別に! 見てただけ、だ、し!」

ルナは片手をパタパタと振りながら、もう片方の手でネックレスを元の場所に戻す。

「いやいや、欲しいんでしょ?」

図星なのが、「うつ」とルナは言葉に詰まつている。それを見て庵はどうなのね、となだめる。

「金、足りねーの?」

「ホネットからまだ今月のおひび……もとい給料をもらつてないから……、」

庵はちらりとルナの戻したネックレスを見る。細めのチーンの間に羽根と月のアクセントがついたもので、値段的には庵的に少々

痛い程度のものだった。だが、よく見ると『これと一緒に「一ノナ」のやつを二つ一緒に買つとお得』割引きだった。

「なあルナ

「な、何？」

「これさ、二つペアで買つたほうが安いからさ、俺のも選んでくれない？ そしたら買つてやるから」

「え？ い、いいよ！ 迷惑だし、それに、こんなもの付けてたら戦闘の邪魔になるし……」

「迷惑じゃねーよ。大体、俺はお前に何度も助けられたじゃん。だからそのお礼はしたいし、似合つと思うよ？ ソレ」

庵はあえてここで『戦い』のことに触れなかつた。こんな、人の事を大切に思える優しい少女に、血生臭い殺し合いなど一度として欲しくない。というのが一番の理由だ。

「え……、似、合つ、かな……？」

当の本人はそんな庵の考えに気づかず、他の言葉に反応して、口に手を当てて少し顔を赤らめている。

「自身持つて。じゃ、俺はどれこじよ？ これとか？」

「ん~、……『』」

ルナが指差したのはペンダントで、片方だけ角と翼の生えたドク

口がついている。不気味に怖い。

「……、選んだコンセプトは？」

「殺しても死ななさそう」

「あつ、わう……、」

8

カウンターにはルナもついてきた。本人は気にしていないのだが、庵は三人のとき以上に恥ずかしかった。何処からどう見てもカッフルにしか見えないからだ。今は店員さんの二口二コスマイルさえも直視できない。

「一緒に包みして直しいでしょうか？」

「あ、はい、一緒にいいです」

「ふふつ、ではそうしますねー、ビーフモ

「ど、どうせ」

庵は丁寧を袋を取った後、小走りでその場を離れた。ルナは「？」と言った顔で彼を追いかけていく。その様子を、カウンターのお姉さんはニコニコと見ていた。

「……、どうしたの？」

「ん、んーん！ なんでもうーー、あ、そりだ。ホラ」

庵は「ゴンゴン」と袋の中をあわつ、ネックレスを取り出してルナに渡す。

「あ、本当にありがとー。え、と、じーじーでつけていいかな？」

「ジーディー、じゃ、俺もつけむか」

庵は自分のペンドントを取り出す。改めて見ると、案外悪くないかもしれない。

と、ふと見るとルナがつければで悪戦苦闘していた。多分、連結部分が小さくて、上手く引っかかるのだ。

「……、手伝おうか？」

「い、いいーー、これぐらじできるーー。」

庵はそのペンドントを軽々と首にかけると、「うぬぬ……」とうなり声を上げながらネックレスの連結部分と格闘する少女を眺める。

とその時、庵の携帯が鳴った。画面を見ると『相川』と出ている。

『もしもーーー、庵、生きてるーー？』

「いい戦場かよ」

『はあ、やつと繋がった……、つつか今ドコにいる、あたしはー

階のファーストフード街にいるんだけど』

「うわっ、遠いな。じゃあそっちに行くけど、時間かかるかもしねいか?』

『うん、分かった。……で、あの子は一緒にいるの?』

なんかすこく険しい口調になつたので、瑠璃華に少々恐怖を感じた庵は、いまだに連結部分と激闘死闘を繰り広げる不器用少女を見て、

『うん、まあ、一緒にけど……、何か?』

『べ、別に! じゃあ、さつさと来てよね! じゃー!』

瑠璃華はそれだけ言つと電話を切つてしまつた。何が気に障つたんだろ? と思つ庵の耳に、唐突に歓喜の声が入る。

「で、できた……」

そこには、連結部分との熱戦を終え、ネックレスをかけたその胸をやけに誇らしげに強調する金髪の少女がいた。

それ以上に、笑顔だ。よく考えると、庵はこの少女の『嬉しさ』からの笑顔を見たことはなかつた。それ故に、見とれていた。

(……、なんだ、)

庵は思つた。あの日、『ティッドバー・リング』は笑つていた。まるで、子どもがゲームで買つたときのような笑顔で。

正直なところ、庵はルナやホネットもそうなのではないか、と思つていた。『戦う仕事（殺し屋）』、それを選んだ人は全て、『戦う』こと好んでやつている人間なのではないか、と。

だが、違う。いや、違つた。

（笑つてる方が、格段似合つてんじゃん）

要は、ルナもホネットも笑顔が好き、ということ。一人とも好きで戦つてゐる訳ではなく、ただ、代わりがいなかつたからその立場についただけ。その場所に自分がいないとたくさん人の笑顔が奪われるから、命が奪われるから、その位置についただけ。本当はずつと平和な世界が似合う人間なのだ。

と、そんなことを考へる庵に、ルナが「ねえ」と呼びかけた。今度は少し顔を赤くして、もじもじと胸に手を当ててゐる。

「こ、似合つ……かな……？」

「ん？ 結構いいと思つよ？」

「そそ、そつかな……っ」

さらに顔を赤くするルナを見て「？」な庵は瑠璃華の事を思い出す。

「あ、そつそつ。そつき瑠璃華から電話があつたんだけどさ……、あの～、聞いてます？」

「あ、え？ あつー も、聞いてるからーー！」

「イヤ……、そなうなりいけど。一階のハンバーガー屋こいのりじ
いから、そこに俺たちが行くことになつたんだけど……、もう行く
？」

「も、もうー？」

なんか顔を引きつらせるルナに、庵は少々困る。

「え、あの、まだいたいんならいいんだけど。別に」

その言葉に目を輝かせたルナだが、すぐにいつもの冷静な顔に戻
り、「い、いい。行こう」と言ってさつさと行ってしまった。恐ら
く、コガママを通そうとしていた自分を格好悪いと思ったのだろう。

早足で進む少女の背中に、庵が声をかける。

「おーい、本当にいいのかー？」

返事は来なかつた。

庵はしおうがなくルナについていく。

庵は気づかなかつた。

彼女が、その胸にかかつた金属の首飾りを、温かくなるまで握り
締めていたことを。

金髪の少女は、とても、『幸せ』だった。

大都市の近場とはいえ、工場の並ぶこの辺りに、用のある一般人などいないだろう。

フレッド・シャインはアメリカの防波堤にいた。

その名前からして、彼がアメリカにいるのはおかしくないと思える。が、彼はイギリス出身で、日本国籍だ。二十代前半の頃に仕事の都合で日本に来てから、もう一年は経つ。お陰で日本語も人並みに話せるようになった。強いて言えば、彼にとつてアメリカなど「海外旅行のプランを立てた時に候補に入る国」程度のものでしかない。

なら何故、そんな彼がアメリカにいるのか。それもまた仕事である。

フレッドは神父だ。日本に協会を持ち、独身ではあるが、居候と居候シスターがいるせいで賑やかな生活をおくっている。だが、それだけなら彼がアメリカに来る事はなかつた。

彼はもうひとつ職業を持っている。今日、アメリカへ足を運んだ理由もそれだ。

俗に言う『殺し屋』、平和の為であるとはいえ、殺人を犯していることに変わりはない。

今回の仕事の内容は『テロの阻止』。『悪魔教団侵略雑音』が裏に大きな計画を企てている可能性があると見て、『絶対正義組織』より彼が派遣された。

可能なら漬せ、との事だ。

だが、フレッドはその防波堤に身を投げ出すよつに転がっていた。

「がつ……、ゴボッ！……し、失敗……しま、し……たね……、」

喉から血が溢れ、その口から流れしていく。

まさか、こちらの存在が知られていたとは予想外だった。ノイズのメンバー、と思われる者達がこの港へ向かい、中型の船に乗つて行くところを観察していたフレッドだったのだが、

（油断していたとはいえ、後ろを取られるとは……、私もまだまだですね）

何が起きたかは分からぬ、ただ、腹に風穴が開いていた。それだけのことだった。

（殺されなかつただけ、良かつたかもしません）と口の中で呟く。（ですが、助けも来ないでしうね……。元々、ここに『執行人』が『ノイズ』から襲撃を受けて動けないから、私が派遣されたんですね……）

一般人がここに来る、という可能性も考えたが、諦めた。こんな排水だらけの海はさすがに何の用もないだろう。

（奴ら、「日本」とか「戦争の火種」とか言ってましたが……、大丈夫ですかね……。日本、には一応ホネットとルナや神和たち^{かんなき}たちがいますが、……手を出されでは困ります。……それに）

『無重鎧の羽根飾り（ロセンステッケ）』、何故それを彼らが呟いていたのか。

フレッシュの意識は、そこで落ちた。

第四章 望みと激突のページ 1

第四章

1

太陽も沈みきつて、静かな街灯が照らす道を、庵とルナは歩いていた。

あの後、昼食をとり、ゲーセンで時間を潰したあとに、ルナの買出しを済ませ（庵が代金を払った）、帰路についた。瑠璃華とは、さつき分かれたばかりだ。

庵の両手には、中身のびっしり詰まつたビニール袋が提がつている。自分が持つ、トルナは言つたが、それは流石に男としてどうかと思つので、自分から進んで持つたのだ。

「……、」

にしても辛い。重い荷物を抱えていることもそうだが、何よりさつきから会話が無い。

ルナを見る限り、もう機嫌は悪くないようだが、話そつとする気はなさそうだ。

（家まではまだあるし……、何か話すか）

だが、こうこうとときに限つて頭に何も浮かばないのが人間である。

「……つ。……えとつ！ あつ、あのさ」

「ん？ 何かな」

「えーと、何での時帰ろうとしたんだ？」

ああ、トルナは返答する。

実は、ゲーセンの後、ボーリングに行くつもりだった。だが、ルナが早く帰ろうと言つてきたので、帰ることにしたのだ。

「ホネットがいるしね」

「ホネット？」

「うん。あの子、心配性だから」
はあ、と庵は首を傾げる。戦う時はクールで、日常は裸エプロン
で、やけに心配性と。一体どれだけ個性的な殺し屋だらう。

「あれが心配性ねえ……」

「ホネットを『あれ』呼ぼわりするなつ！」

けつこう本氣で怒られた。それほどホネットといつ存在はルナに
とつて大切なのだろうか。

「……ご、ごめん」

「えつ！ あつ！ ゴメン！ 私こそなんか怒鳴っちゃって……」

しょんぼりとうな垂れる庵を、ルナは必死で励ます。

「……、そういえば、ルナとホネットってどうじつ関係？..」

「兄妹」

兄妹だった。

ルナがすごい単語を口にしたので、庵は思わず噴き出す。

「んな訳ねえだろ！ 名字とか、瞳と肌の色とかも違ひじゃん、お
前ら！」

「その言葉にはイラつとくる。名字とか、瞳と肌の色も同じじゃな
いと家族には、兄妹にはなれないの？」

「つ……、「ermen。……つーことは、えつと、親の再婚とか？」

「違う。私もホネットも親はいない。私が、ホネットに拾われたの
庵は眉をひそめた。

「拾、われた……？」

その間に、ルナは平坦な声で「うん」と答える。

「私が8歳か9歳ぐらいの頃かな、フランスの協会の前に捨てられ
てた私を、ホネットが拾ってくれたの」

「……、つつか、今何歳？」

「16」

「同じ年だった。

ルナがものすじこ返答をしてきたので、庵は思わず噴き出す。

「んな訳ねえだろ！ 第一印象、中学生以下のお子様だろー。身長とか、特にム……」

庵がその単語を言い終わる前に、ルナのレイピアが彼の髪をかする。

「『ム』？ その後には何が続くのかな？」

「イヤツ！ なんでもつ、ないですかッー！」

それだけで人を殺められそうな殺氣を笑顔で放つにルナに、庵は全身全靈で謝る。本当に、その剣はどこから出てくるんだか、と内心思いながら。

そ、トルナは不機嫌そうな顔で剣を降ろす。

「……、あ！ そういえばさ、あの後」

「……？」ルナは少し考えて「ああ、『デパートの？』

庵はうなずく。

「あれだけの事があつたのにさ、警察や野次馬が全く来てなかつたし、そこにいたはずの人もいなかつた。それに……」

「誰に話しても、それに無関心そうだった、と？」

先を読まれて少し動搖しながらも、庵は「そうそう」と相槌を打つ。

「警察も野次馬、救急車……、來たよ。でも、一般人に『神術』、『魔術』、特に害のある『魔術』を見られるわけには行かないから、『フリーメイソン絶対正義組織』側で隠蔽工作するの」

ルナは一息置いて、

「やり方はいろいろあるんだけど、今回は私の『無重鎧の羽飾り』ロゼンステッケで彼らの『事態の重要性』を軽くして、その物事自体に無関心にさせた。だから、その人たちにとつてあの事件は『ガムを踏んだ』程度のことになるの」

そのやり方に、庵は少し恐怖を覚える。

「んな事もできんのかよ、あの羽根……」

「『重量』のあるものなら大体軽くできるよ。人の命とかは軽くできなけれど」

いや、できなくていいと庵は内心ゾッとする。

対してルナは、得意分野のことを説明してて楽しげに、田を輝かせながら続ける。

「でね、昔……って今もいるんだけど、『ヴァルキュリア』っていう主神の天使がいてね。あ、『ワルキューレ』とも言つんだけどね。

勇者の魂を集める使命があつて、世界を飛び回つてたんだけど、なんとの天使、翼がなかつたの！ どうやつて海を越えたんだと思う？

それはね、鎧につけてる装飾用の羽根だつたの…」

びしつ！ と指を突き立てるルナ。

「…………あー」

正直、この部類の話はついていけないので、庵はとつと話を終わらせようとする。

「ううう。で、その羽根がお前のアレだと。分かつた分かつたすごいなー」

「…………」

すねてしまつた。

しまつたー、と思つた庵は、不本意ながら話を合わせようとする。

「あ、じゃあさー！ 僕のケガの治りの早さつてのはー…？」

むー、と視線だけを庵の方へ向けるルナ。その瞳が、「どうせ興味ないんじょ？」と言つている。

「ううー！ いや、でもー。うー、やっぱ自分の体のことだし、気になるじゃん！」

辞書で「営業スマイル」を引くと図解でついてきたやうな笑みを浮かべる庵を見て、ルナはため息をこぼす。

「…………ま、いいか。私も気になるし」

ルナは星空を眺めて、「あのね、この星にはね、いや、宇宙も含めるんだけど、たくさんの神様や天使、悪魔が存在していたの。まだ生きてるものもいるけどね。とにかく、彼らはもう死んでいて、

残っているのは魂だけなんだよ。ほとんど全ての『神術』や『魔術』のリンク先はこれなんだけど、たまに『まだ生きてる者』とリンクする人間がいるのよ

私とかね、と付け加える。

「こういつタイプは珍しいんだけど、でも、せひ珍しいタイプがあるの。

神道では『新星天児^{ヒカルズクニ}』って言われるんだけど、その名の通り『新しく生まれた神や天使、悪魔』とリンクしたものね

「それが……俺？」

「かもしれない、ね。まだ覚醒してもいいから、確信はできないけど」

「ふーん。じゃ、ホネットは……あ

庵はしまったと思った。ここで話を展開してはならない。

だが、時既に遅し。

ルナの瞳は輝きだした。

「ホネット？ ホネットね。あのねホネットもまた特別でね話せば長くなるけど目的地までまだあるしゆつくり話していくね」もう既に早口である。

今回は自分に責任がある、と諦めた庵は、しかし笑っていた。
(まあ、こうやって話していても楽しいかもしないな。いつまでルナと一緒にいられるかもわからないわけだし)

いつか別れが来る。なら、精一杯今を楽しむべきだ。

「おう。それで？」

今を楽しむ、初めて感じたその感情に驚きを感じながらも、庵はそれを受け入れていた。

2

「…………ツー！」

庵とルナはほぼ同時に、目を見開いた。
目に見えるもの、耳に入るものの、痛み、その全てに何の変化もない。

だが、何かが体を突き抜けた。

庵にはその正体が全く分からぬ。答えは、ルナが知っていた。

「これは……、『魔力』ツー！」

「…………！ これが…………！」

「…………？ 分かるの？」

ルナが予想より的外れな質問をしてきたので、庵は少し戸惑つた。
「え、ああ、うん。なんとなく…………。

つつか、『魔力』つて…………！」

ルナは少しの間複雑そうな表情を浮かべていたが、今はそれどころではないか、と頭を切り替え、

「『悪魔教団侵略雑音』^{ノイズ}が近くにいる。それも、こちらで分かるぐらいに能力を放出しながら。目的は、多分あなただと思つ」
庵の脳裏をよぎるのは、デッドバーの顔。

「また、あいつが…………」

「帰つてて」ルナはレイピアを片手に持つと、「私が足止めをする。
あなたは、怪我しないように帰つてて」

「…………でも」

もう一つ、脳裏に浮かぶ映像は、ボロボロの少女。自分を逃がす
ために、護るために戦つてくれた一人の女の子。
ルナはムツ、とした表情を作り、

「でも、じゃない。狙いがあなたである以上、あなたを敵の元に連

れて行く必要はない」

それは突き放すような言葉だったが、裏返せば、今度は護り切れる自身がないという事か。つまり、自分を囮にする気さえあるのか。庵は心で舌打つ。逆に苛立つてくる。なぜ、この少女はここまで他人を護ろうとするのか。

「お願い。帰つて。そして、ホネットを呼んで。あなたは役に立たない、足手まといだつて言つてるわけじゃないの。あなたにはあなたのやるべき役目がある」

ルナの言いたいことは分かる。実際、デッドバーとやり合えたのはホネットだけだ。戦闘なんてまるでできない庵が出しゃばるよりも、ホネットが一緒に戦ってくれた方が、ルナにとつてはずっと頼りになるのだろう。

ルナの安全を考えるなら、客観的に考えるなら、その方法が一番いい。

心の中だけでも否定したいが、それさえもできない事実。

ただ「無力」という言葉だけが、庵の頭を駆け巡る。

「……分かった。ホネットを呼んでくる」

ルナは苦笑いを浮かべると、「ありがと」「」と言つてその場から去つた。

残つた庵は、唇をかみ締めながらも、帰路を進んだ。

ルナは通りを日にも留まらない速さで走り抜けてゆく。『無重鎧の羽飾り』の効果で摩擦、空気の抵抗、自分の体重などを調整して、常人ではありえないスピードを生み出しているのだ。その速さは、時速50キロを超えている。

その走る先には海があるはずだ。

(……、船？ 太平洋側から船が来るなんてありえないけど……)

だが、可能性はある。電気会社ノイズの本社はアメリカだ。なら、『悪魔教団侵略福音』の本部もその付近にあってもおかしくはない。しかも、船だ。航空機も使わず、船で来たという事には、それなりの訳があるだろう。

(確実にあつちはレーダーをすり抜ける図式を持つている。なら、次に考えるのは人目……。つまり、相手は潜水式の船を使って来ている……?)

一つだけ、疑問が浮かぶ。なら、なぜ魔力を放つてきているのか。誘われている、としか考えられない。こちらが、警察や軍隊に連絡をいれず、『執行人』だけでやつて来る、という絶対的な自信があるのだろう。

ルナは確かにそうはしなかった。彼女の座右の銘は『誰も死なないこと』だ。他の『執行人』からは笑われるようなモットーだが、それが彼女の全てだ。誰も死ななくていい、死ぬのは自分たちのような人間だけだ。

だから、彼女は一般人を巻き込まない。どれだけの訓練を積んでも、警察や軍隊は普通の人間だ。そんな者が、「『人』を超えた力」に太刀打ちできるわけがない。だから、たとえ自分一人で戦うこと

になろうとも、彼女は逃げない。自分が逃げたら、その後ろにいる、自分が護っていた人が犠牲になる。そんなの、耐えられない。

しかも、その中にある少年が入っているなら、なおさら。

「……、」

ルナは仕事上、たくさんの人を護衛してきた。時には大富豪、時には政治家、様々な分野のトップを。彼らは皆、汚かつた。汚職に手を染め、金に物を言わせ人を殺し、自分の盾など幾らでも用意する。一言で言えば、自己中心的。自分さえ安全で、裕福ならそれでいい、そういう人ばかりだった。

だが、あの少年はなんだ。

大した関わりもなく、これきりの縁だというのに、あの少年は自分の事をかえりみず、護衛する側のルナを護ろうとする。そんなことしても何の得もないのに、自分に気を使ってくれる。

あんな人、初めてだった。

ホネットに似ているかもしれないが、また違う。

ホネットはたまに、自分と接する時に影を見せる。だが、あの少年は純粋に自分と接してくれる。笑ってくれる。

ルナは、その笑顔を護りたいと思つた。仕事で護るのとは違う、なにか他の感情がそう思わせる。

この感情は何なのだろう。

今までに感じたことのない、とても暖かくて、もどかしくて、でもどこか嬉しい、そんな思い。

あの少年の事を考へると、不思議と笑みがこぼれてきてしまう。

もつと、彼と話したい。今度こそ、きちんと名前で呼んであげたい。

もう、これきりの縁、なんて引け目を感じたくない。

「だから……」

まずは、目先の問題を終わらせないといけない。これを終わらせ

て、笑顔で帰りたい。

ルナはその華奢な首にかかる金属に手を触れる。それだけで、強くなれる気がして。

「……庵……」

呟き、彼女は敵の元へと走り抜ける

「……ツ！」

庵は驚いた。

ルナと分かれて数分経つたところで、家に着いたのだが、そこで驚くべき光景を田の前にした。

「なんだ、これ……」

家の周りを何か、透明な半球のようなものが覆っている。雰囲気としては、漫画でおなじみの「結界」のそれに似ている。何が起こっているのかわからず、ただ立ちつくす庵に、不意に声がかかつた。

「……あなたは誰ですか？」

庵は振り向く。そこには、巫女が着ている服を身にまとった、同年代ぐらいの少女がいた。

「え……、だ、誰つて」

庵が戸惑っていると、少女は不思議そうに彼をじーつ、と見ると、何かひらめいたように、

「ああ、あなたが獄魔庵さんですか」

あまりにもいきなり本名を当てられたので、庵は少し彼女に敵意を抱く。

(……まさか、敵？)

警戒態勢に入った庵を見て少女は「大丈夫ですよ」と薄く笑う。「敵ではありません。私の名前は「神和巫東」^{かんなぎみとう}、「執行人」^{ハントメーラン}です。上位支部からの命令で、ホネットさんと竜串さんの援護をしごきました

した

「援護……？」

「ええ。ホネットさんから上位支部へ救援要請が出たので、現地に一番近い場所にいた私が派遣されたわけです」

「ホネット……。そうだホネット！ なあ、ホネットはいないのか！」

「ルナから呼んで来いって言われたんだ！」

庵が訊くと、巫東は怪訝そうな顔をして、

「ホネットさん、ですか？ ……おかしいですね。ここにはいませんでしたし、なにより竜串さんと一緒にいる、と上位支部には書いてあったので」

「…………！？ 今なん、て…………？」

巫東は「？」とした顔を浮かべながら、

「だから、ホネットさんが竜串さんと一緒に敵と戦っているから、あなたを護衛するために私が呼ばれたんです。この結界も、そのためなのですけど」

庵の全身から血の気が引いていく。

ホネットがルナと一緒に戦っている？ そんなはずはない。庵は今日一日中ルナと一緒にいたし、ホネットは朝から仕事で出ていた。一緒にいるはずがない。そもそも、戦闘もしていない。

ホネットが嘘をついた？ としか考えられない。なら、何のために？ そこまでしなければ神和巫東は来なかつたから？ 庵の護衛を固めたかったから？ ルナの負担を減らしたかったから？

庵は巫東が嘘をついている、という可能性も考えたが、違うと思った。明らかに敵意が感じられない。根本的理由はないが、敵だとは思えなかつた。

「なんで……？」

「？ 何を悩んでいるんですか？ 魔力の放たれてい、あの方角の先で、二人は戦っているのではないですか？」

巫東は、海のある方向を指差す。確かに、この方角にルナは走つていつた。

分からぬ。ホネットの考へてゐる」ことが。何のつもりだ。何が目的なんだ。

庵は少し考へた後、

「巫東さん。お願ひがある……あります」

巫東は困った顔で庵を見ると、「なんですか？」と返した。

「俺を、その場所へ連れて行つてくれませんか？」

「……？ 何を言つているんですか？」

「すごく場違いなことなんだろうては分かつてます。でも、何が起つているのか、確かめないと……。もしかしたら、ルナは……」

その先は言えなかつた。

「意味が分かりません。どう理由があつたとしても、そんな危険な場所に行か」

「それでも！ 行かなきやならないんです！ あいつは俺を守るために一人で戦つてくれていてるのに、それを遠くで見ているだけなんてできないんだ！！」

「……！」

庵に圧倒されて、巫東は少し身を縮める。

彼女は顎に手を当てる、しばらく考え込んだあと、笑つてため息をついた。

「あなたみたいな人、嫌いじゃないですよ。竜串さんはきっと迷惑するでしょうが、彼女もきっと、心の底では嬉しいはずです」

「え！？」と庵は顔を赤くする。

「そ、そそそな……ん？ て言つことは？」

巫東はクスクスを笑い、

「さあ、彼女を助けに行きましょ」

と、庵の額にお札を貼り付けた。

「では、行つてらっしゃい。わたしも後から参ります」

え、と庵が言つ隙もなく、光と音ともに庵の体はその場から消えた。

庵たちが住むこの町は、港町なだけあつて漁港が栄えている。

夜の沿岸は、卸売市場の建物があちらこちらに並び、その青白く月光に映える屋根がどこか異質な雰囲気を漂わせる。長く続く防波堤は、木の枝のように海に手を伸ばして突き出していて、白い屋根と合わせると、それはさながら巨大な鳥賊の触手のように見える。

その触手の先には黒光りする潜水艇が一隻、海の上に顔を出していた。だが、海に潜むそのシルエットを見る限りではとても「潜水艇」とは言えない。「潜水艦」、主に軍事目的に使用される、銃器を積み、並の火器ではビクともしないように見える丸い外見をもつそれは、ただじつと、獲物の動きを待つ肉食獣のように息を潜めていた。

だが、それは「普通の人間」から見ての沈黙だ。その船がただ一つ押し殺していないものは、ある種の人間が見れば分かる。

それを含めても、ルナは絶望していた。

彼女がいるのは沿岸にある小さな工場の上だ。このあたりでは一番見晴らしのよさそうな場所だったので、ここで敵の程度を確認しようとしていたのだが、

「ありえない……。軍事用潜水艦……？　しかも推定するに相当な銃器を装備してる……」

いろいろな点から、ルナはある潜水艦を分析していた。戦力、機動性、中の人間の数、それらを考えても、やはり彼女の頭には絶望の一文字しかない。

まず、あれは米軍式だ。世界一の軍事力を持つ軍が持つている潜水艦なんて、一隻だけで小さな島ぐらいは簡単に吹き飛ばせる。暴れだして自衛隊が到着するまでには、この町は焦土と化しているだ

る。しかも中にはいるのであらう人間たち。五、六人に満たないくらいの船員でこんなに大きい船を動かしていられるのは「魔術」を使っているからだろう。放つてはいる魔力の大きさも考えて、決して雑魚ではないだろう。

ルナは片手に握り締めたレイピアを眺める。

結論から言えば、無理だ。こんな軽装備で勝てるほど「魔術」は甘くない。昔から知つていたことだが、前回のデッドバーとの戦いでそれを思い知られた。

気づけば、冷や汗が頬を伝つていた。ルナはそれを空いた手で拭き取ると、自分の周りに「無重鎧の羽飾り」を出現させた。月光に映える純白の羽根は、彼女の周りをひらひらと舞う。デッドバーとの戦闘では出現さえもままなかつた羽根たちは、いつも通りの数と位置で、いつも通りの効果を發揮 一般人をこのあたりに寄せ付けなくしている。

ルナは不思議でたまらなかつた。デッドバーの言い様では、もう二度と出現しない筈なのに、それができている。何か、あの能力には「穴」があるのだろうか。もしそうだとしたら、あの図式を潜り抜けることができるとするならば、デッドバーだけには勝てるかもれない。

だが、あくまでそれは「デッドバーだけ」の話だ。彼は今まで戦つてきた他の「悪魔教団侵略雑音」の者と比べれば飛び抜けて強い。しかし今回、あの潜水艦の乗組員は全てデッドバー並の「魔力」を放つてはいる。それだけで強いかどうかは確信を持てないが、察するには相当なものだとルナは思つてはいる。

つまり、デッドバーを何とか倒せたとしても、残りの戦闘員を倒せる自信はルナはない。というか不可能であつて、無謀な行為だ。ルナにはもう一つ疑問があつた。まず、彼らの目的は「獄魔庵」の抹殺ではないのか？ この町には現在、自分とホネットしかいない。ホネットは十分にあっちから見ては強敵なのだが、逆に言えばそれだけだ。ホネットは強いが、デッドバーぐらいの戦闘員が一人

でかかれば簡単に負けてしまう。それぐらいの強さしかない。

だからこそ、たかが一人の高校生を殺すぐらいで、何故ここまで戦力を用意する必要があるのだろう？

「何か他に目的があるとしか思えない……。とにかく、敵地に潜り込まない以上、詮索の余地はないんだけど……、ホネット遅い……」ルナが少し不機嫌に呟いたその時、

「ほおお。これはこれは、ご到着が早いことだ。さすがは『絶対正義組織』、と言つたところですかな？」

老人のようなくぐもつた男の声が、ルナの耳に入った。

「 ッ！」

彼女が反応するまでもなく、刹那、ルナの足元が爆発した。吹き飛ばされはしたが、「無重鎧ロゼンハーネの羽飾り」の能力でルナは音もなく地上に着地し、工場の方を見る。

その先には轟音を立てて崩れ落ちる白い工場と、その中から歩いて出てくる一つのシルエットがある。

「ほほう。これがデッドバー殿の仰っていた衝撃吸収の羽根ですか。なるほど、見惚れてしまうような美しさがありますね」

その声に敵意はなく、ただ淡々とした感想があった。

月光に照らされて姿を見せたのは、一人の老人。きつちりと整髪された肩まである銀髪、彫りの深い優しそうな顔には英国人の瞳と肌。そして痩せぎすな体躯、それを包むタキシードはそれら全てを「英國紳士」という印象に変えている。

第一印象から言えば清潔的なイメージが浮かぶが、その清純な体にまとわりつく黒いものが、ルナに「敵」と認識させる。

「あんた……、『悪魔教団侵略ノイズ雑音』の……」

ルナが警戒態勢に入ったのを見て、銀髪の老人は「おお、失敬」とドレスグローブを身にまとった手を横に振りながら、

「自己紹介が遅れましたな。ええ、察しのとおり。私は『悪魔教団

侵略^{ノイズ}雑音』のメンバー。名をフレデリック。フレデリック・バッテ

イスターと申します。以後、お見知り置きを」

フレデリックという老人は深くお辞儀をした後、さわやかな笑顔をルナに向けた。敵に対してのあまりの紳士ぶりに、ルナは思わずうつ、と後ずさりしてしまった。

「わ、私は敵に名乗る必要はないとお

「おお、いえいえ。大丈夫です。無理をなさらずに」「えっ？ ヒルナはきょとんとした顔を浮かべた。

フレデリックはさわやかな笑顔を崩さずに続ける。

「あなたの方の名前なんて覚えていても無駄というものでしよう？ もしかして墓碑でも探してもらいたいのですか？」

「つ！ あんた……！」

「悪いのですが、ここで時間を費やすのはいささか如何なものかと。私にも一応、仕事というものがありますので。早々に終わらせていただきますよ」

老人は虚空からサーベルと取り出すと、その切っ先をルナへと向けた。

「なるほど、偶然。私も時間ないの。あんたなんかのに手間取つている暇なんてないから、早めに終わらせてよね」「ね

ルナもそれに応えるようにレイピアを構え直す。

月光に照られた海辺で、静かに戦いは幕を上げた。

「ふおん、という音とともに、庵の体はその空間に出現した。

「つと、うわつ！」

なんとも情けない効果音と声を上げた庵は、その場に尻餅をつく。「つつ……、もうちょい低い場所からだせねーのか……。ほぼ2メートル上から落ちたぞ……」

ズキズキと痛むお尻をさすりながら、ビニに落ちたのかを確認する。

庵がいる場所は、卸売市場のせり場をバックにして月光に映える海の、その二つの間にある防波堤の上だつた。

ここには何度も来たことがある。両親もいなくて、海老村とも会つていらない、つまり友達は瑠璃華ぐらいしかいなかつた頃の彼が、よく一人で釣りやスピアファイッシングをやつていた場所だ。

だからこそ、奇妙な点がある。人がいない。ゴールデンウイークのせいもあって、夜の漁に出る人がいないのは分かるが、昔からこの場所を知っている庵としては、この人気のなさはどうも腑に落ちない。まるで、あのデパートの事件の、デパートから出て来た時のあの異様な風景のようだ。つまり、ルナのあの羽根による能力が発動している、ということか。

つまり、この辺りにルナがいるのか、と彼女を探す庵だが、彼女を見つける前に恐ろしいものを見つめた。

「…………。デッドバー…………！」

庵の目の前に広がる海のちょうど真ん中辺り、そこに浮かぶ黒いシルエットが顔を出している部分の上に、それはいた。

距離は遠い。つまり、庵が見えている「それ」もぼやけていて、

デッドバーである、という確信はない。だが、そこから放たれいる妙な違和感。それが、無意識ながらにも庵に昨夜の記憶を呼び起こす。

庵はすぐに近くの建物の陰に隠れた。前述したように、距離は遠い。まだ庵が近くにいる、とはバレてはいけないはずだ。

庵はデッドバーのいる方向を睨みつけながら言った。

「ちくしょう……。本当に来てやがる……！……、ん？ 待てよ。なんであんなに余裕に構えてんだ？ ルナが向かつたんだから、戦うとか、逃げるとか、なにかするだろ普通」

まさか、「即行で片付けました」はないよな、と縁起でもない可能性を考えながら、庵は思考を巡らせる。

（ルナは確実にこっちの方向に向かつていった。そしてその先にはデッドバーがいた。んで、はいここで会つたが百年目… いざ勝負！ …ルナの性格から考えてそれはない。まずは様子を伺うはずだ。なら、 …ルナはまだどこかで息を潜めている……？）

庵の思考がそこまで辿り着いた時、遠くから爆音……といつよりは建物が崩れるような音がした。

庵は驚いて、その場所を確認しようとするが、見えない。何かないかと辺りを見回して、せり場の屋根へのはしごを見つけると、それを一気に駆け上る。

屋根の上に立つた庵は見晴らしの良い場所を探し、音源の方へ目を凝らす。
視界の先には、崩れる小さな工場と、そこから立ち上る白煙が空を覆っていた。

それでもう一つ、ぼんやりと、だがハツキリと、噴煙の中から吹き飛ばされたように出てきた、一人の少女が見えた。

「 ッ！ ルナ！」

庵は叫び、彼女の元へと向かう。

戦いは、誰が合図する事もなく始めた。

「はあっ！」

ルナは一気に間合いを詰め、レイピアをフレデリックの体に突き出す。フレデリックはサイドステップでそれをかわし、サーベルでルナの剣を弾き飛ばした。

「なつ……！」

レイピアが回転しながら宙を舞う。

「ほほほ。甘いですねえ。急所を狙わないから、簡単に避けられるのですよ」

フレデリックは丸腰になつたルナに、容赦なくサーベルを突つ。だが、その突きは急に威力を落とし、ついには止まってしまった。フレデリックが確認すると、刀身に幾枚かの羽根が付いていた。

（…………！ 衝撃吸収の付加ですか…………！）

フレデリックは攻撃を中断し、サーベルに付いた羽根を薙ぎ払つた。

「ほほう。運が良かつたですねえ。能力に助けられるとは…………。むつ？」

フレデリックが再び構え直したときには、ルナはレイピアを手にして、彼に攻撃を繰り出そうとしていた。

「おつとー！」

フレデリックは後ろに下がつて、間合いを開く。

ルナは跳躍し、落下と共にその鋭いレイピアをフレデリックに突き刺そうとする。その高さは、常人ではありえない程のものだ。

それを目に留めておきながらも、フレデリックの表情に焦りの色は見えない。

「ほほっ！ 上から仕掛けてくるとは、なかなか能のないお方ですなあ！」 じういう攻撃も、避けようがないでしように！

フレデリックは笑顔を浮かべ、手にあるサーべルを落ちてくる彼女めがけて突き出した。ルナのレイピアは長い方ではあるものの、それでもサーべルのリーチには敵わない。このまま落下してしまえば、彼女の脳天を一本の鉄針が貫くことになる。

だが、ルナはフレデリックが思うような軌道を描いて落下しては来なかつた。彼女の体はサーべルの切つ先をギリギリで掠め、彼女の剣がフレデリックの左肩を貫いた。

「ぐつ、ああああああああああああああー?」

フレデリックが苦痛に崩れようとすると、ルナは刀身が折れないようレインピアを勢いよく抜き、彼の顔面に回し蹴りを叩き付けた。

フレデリックの体は吹っ飛び、数回バウンドして地面に転がった。ルナは姿勢を戻し、レイピアに付着した血を振り払った。そして周りに漂う白い羽根を一枚手に取る。

「能がないのはそつち。空だつたら移動できないのはサルでも解る。あと、何か間違ってるみたいだから言つとくけど、この羽根の能力、衝撃吸収じゃないから」

「なん……ですか？」

実際には「おもみ」を軽減できる『無重鎧の羽飾り』の能力で自分の体にかかっている重力のバランスを乱れさせて、軌道を変えただけというトリックなのだが、そもそも『無重鎧の羽飾り』の能力が「衝撃吸収」だと思い込んでいるフレデリックにはそんなことは思いつくはずがない。

フレデリックはようよると起き上がる。押さえてもいらない左肩からは血がじくじくと溢れ出し、右目に大きな痣ができる。いる。

「教える必要はない。たとえ教えたとしても、その体じゃ私には絶対勝てない」ルナはレイピアの切っ先をフレデリックに向ける。「降参しなさい。そうしたら、私がこれ以上あんたを傷つける必要は

なくなる」

フレデリックはしばらく彼女を見つめた後、なにか振り切れたようにな笑った。

「ははははっ。くくくくく……。いや、失礼。久しぶりに面白い方に出会えたもので」

ルナは不思議そうな顔を浮かべて、「何で?」と聞き返す。それを見たフレデリックは、まるで孫と遊ぶ時の祖父のような優しい笑みを浮かべて、

「決して急所は狙わず、レイピアを刺す時も、腕が使い物にならなくならないように、上手く筋の隙間を貫く。そして締めには降参しろ。……相手のことを考えすぎですな。いつか足を掬われますぞ」彼の言葉はどこか、強い意志が籠められているようにルナには聞こえた。

「……いいの。それで誰かを殺さずにはむなり、いくらでも私は危険を犯すと決めたから」

フレデリックはまた笑った。嘲り、ではない。ただ純粹に可笑しくてたまらないのだ。

「ははっ、甘い。とことん甘いお嬢様でいらっしゃる。まるであの方の真逆をいく考え方。平和ボケ、と言つのでしょうか。」
「のを」

「なつ! へ、平和ボケなんかじゃない!」

ルナは顔を真っ赤にして言った。フレデリックはそんな彼女を幸せそうに眺めると、手に持っていたサーベルを、ルナの足元に投げ捨てた。

からん、と呆氣無い音を立てて地面にサーベルが転がる。

「……! なん……」

「でも、そんな考え、私は嫌いではありません。降参します。私の負けです」

「……、」

フレデリックはルナに歩み寄った。そして、彼女に手を差し出す

と、

「最後に、貴女の名前を教えていただけないでしょうか？ こんな敵にですが」

悲しい顔を浮かべるフレデリックを見て、ルナは心のどこかでホッとした。

「私はルナ。竜串ルナ。よろしく、フレデリック」

「ほほお。私の名前を覚えていただけているとは、誠に光榮です」「約束して。『悪魔教団侵略^{ノイズ}雑音』から抜けると。あなたみたいな人は、ああいう所にいちゃいけない」

フレデリックはルナの目を見た。強い決意が宿つた、紅い目だつた。

「ええ、分かつています」

フレデリックは笑顔で言つた。

「貴女のような平和ボケした人間は、即急に死ぬべきだと、ね」

「……え？」

ルナが間の抜けた返事を返したその時、彼女の真後ろにあつた工場が崩れ、その瓦礫が襲い掛かった

景色が、揺れた。

実際には自分がバランスを崩して視界がぶれたのだけど、それだけではないのでこの表現は正しいと思う。

空以外の風景が、一気に襲い掛かつてきただから。

しわがれた笑い声が耳を劈く。近い距離で発せられたものが遠くにあると思えるぐらいには、自分はよほど啞然としていたのだろう。逃げ道はない。

まずい、彼女が直感した時には、その猛威は目の前まで迫つていた。

冷や汗が頬を伝い落ちる、そこでなぜルナは彼のことを思つたのだろう。

まるで吸い寄せられるかのように一点に向かつて降り注ぐ瓦礫を眺めながら、フレデリックはただ笑っていた。その顔に、今までの「英國紳士」という厳かな雰囲気は微塵も残つておらず、凶悪で狂いきつた感情が余す所なく溢れている。

「ぎやははは！ は、はっは！ 馬鹿ですねえ、馬鹿ですよ！ 私が『絶対正義組織』なんかに寝返ると本気で思つているんですか！」

？」

それはもう嘲りと言つよりは罵倒にちかいニユアンスだった。

「温室育ちのガキはこれだからいけない！ すぐに入を信用する！ はっは！ 面白い！ その結末がこれですよ！」

そういう言葉がしばらく続いて、瓦礫の流星群はやっとその勢いを止めた。

辺りはすつきりと建物が崩れ落ち、とても見晴らしの良い夜空が映えていた。

白煙で視覚がシャットアウトされたその先にいる少女は、もう原形すら留めていないだろ？

そんなことを予想しながら、フレデリックは瓦礫でぐしゃぐしゃになつた足場を突き進む。

「……ほおお」

瓦礫の中には一点だけぽかんと穴が開いたように開けた場所があった。アスファルトが唯一見えるそこには大量の白い羽根が落ちていて、中心には金髪の少女が地面にうつ伏せで倒れこんでいた。そこから伝う液体が小さな血をつくる唇は、虫の息という言葉が似合うほど呼吸を続けている。

「あれだけの物をほとんど受け流すほどの羽根を出現させると驚きですが、どうやら神力^{マナ}が枯渇しているようですね」

神力とは、神術を使う時に必要なエネルギーだ。だがゲームでよく言つ「MP」とは違つて、これ自体は「HP」と同義。このエネルギーは術者の生命力から精製されている。つまり、術者は術を使ふし神力を放出し続けるほど、自身の体力を削っていくこととなる。今の彼女は体力が尽き果て、ほぼ瀕死の状態になつてゐるのだ。

普通なら過労死する。その疲労の度合いは、一田中寝ず食わずで走り続けた場合に匹敵している。

それでも、彼女は呼吸をしている。

「とつさの判断力、それについてこられる身体能力……なるほど。伊達に個人で地域担当をしているだけのことはあります」

ですが、とフレデリックは続ける。

「メンタル面がまだまだ年相応なようで……。くっくっく……！ ははは！ 所詮、最後に生き残つた方が勝者なのですよ！ 騙しても、裏切つても勝つ、負けることが許されない！ それが魔道！ 平和ボケした神道とは違うのですよ！」

笑いながら、フレデリックはルナの髪を掴み、無理矢理体を起させた。

「ぐつ。う……」

ルナが悲痛の声を上げる。それを楽しむかのようだ、フレデリックの笑い声がさらに増す。

「後悔してますか？ 人を信じた挙句これです。可哀想だから、信じてあげよう、そういう情が生み出した結果がこの失態ですよ！」

苦痛に耐えるルナの口が動く。

「後悔……な、んてしてない。私は……、人を、信じる、道を、選んだんだから」

「人を信じる道？」

はつ、とフレデリックは笑った。そしてその表情が突然険しくなつたと思うと、彼はルナの体を地面に叩きつけた。

「がつ！」

「この期に及んでもまだ『信じる』とか綺麗事又かしてんじゃねえぞ小娘があッ！！ 裏切られたんだよ！ てめえは裏切られたんだよ！ あー、くそっ！ イライラさせてんじやねえ！ 殺す！ すぐ殺す！ 今から殺す！！」

自我を見失った雄たけびのような罵声が、ルナの耳を劈く。

フレデリックはサーべルを振りかざす。狙いは頭、詳しく言えば下顎。口を吹き飛ばして、もう一度と喋られない状態で昇天させてやろう、という理由からだ。

まずい、とルナは体に危険信号を送る。だが、大量の生命力を消費し、必要な器官だけエネルギーを送る彼女の体は、手足なんて末梢部分はぴくりとも動かない。

「死ねやアア ッ！」

奇声を発しながら、フレデリックは勢いよくサーべルを振り下ろした。

ルナは強く目を瞑つた。

その後のことは良く覚えていない。

自分が死んだのか、まだ仮死状態の夢の中なのか、とりあえず目を開けることができそつたから、彼女は少しづつ視界を開けていった。

そこには、白目をむいて氣絶 いや、絶命しているフレデリックの体が転がっていた。

「 なッ！」

彼が持っていたサー・ベルは、持ち主の傍らに転がっていて、血に濡れていないことから、一応自分は止めを刺されていない、ということを悟ったルナは次の疑問に辿り着く。

(一体誰が……！？)

足音が響いた。そちらに目を向けたいところだが、今のルナは首を動かすことさえままならない。

彼女はただ、耳に入していく言葉を聞き入れることしかできない。

「 おウ おウ おウ。ナニヤつてンだよコイツ。んだ？ ジジイだから
もう死ロセンスコロ 繁碌してんのかア？ ロセンスコロ 無重鎧の羽飾り』の術者は殺すなつってたろ
うが。おい、返事しろ…… つてもう死んでんのかア。ハツ。弱エ」

ルナは目を見開いた。

声の主はフレデリックの体を蹴飛ばし、ルナの目の前でしゃがみ込みむと、彼女の顔を覗き込んだ。

「 よウ よウ よウ。ひっそじぶりだなあオイ。あのガキは元氣してつか？ お譲ちゃん」

デッドバー・リングは、その口の端を吊り上げて笑った。

最近は曇り空が多かつたものだから、こんな星の綺麗に映える夜空が見えるのは久しぶりである。だが、今のルナにはそれを味わうどころか気づく余裕すらない。未だに動かない体、地面に横たわるその先に立つ影に、彼女の神情は集中していた。

「なぜ……、ここに……？」

はっ。とデッドバーはルナの敵意ある視線を気にせず笑う。

「あれだけ暴れりや誰だつて気づくだろ。それに、俺はお前に用がある」

「なに……？　お前は、獄魔庵を狙つてここに来たんじゃ……」
ルナの言葉に、デッドバーは目を丸くする。

「……？　ナニ言つてンだお前。なんで俺があんな一般人のガキを殺すためにわざわざ日本に来なきゃなんねンだよ？」

「…………え？」

無意識にルナの口が動く。それもそのはず、彼女はあの少年を守るためにここにやつてきたのだ。だが、デッドバーの口ぶりだと、あの少年は誰にも狙われていられないらしい。

なら、なぜ。

デッドバーは不思議そうな表情のまま続けた。

「あアあアあア？　イヤ、「え？」とか言われてもなア。つーこと
はナニ？　お前、勘違いしてたクチ？」

銀の長髪を搔きながら、デッドバーはルナの顔を覗き込む。

「…………どうやら、そうみてエだな。道理で見つかりやすいと思つた

「ゼ

「……見つかりやすい？」

田の前の相手は何を言つてゐる。何が田的でここに来たのだ。

デッドバーは「くくっ。本当、何も知らねーみてエだな」と笑う。

「お前だよ。厳密に言やあ、お前じやなくて、その能力『無重鎧の羽飾り』だけどなア」

一瞬、デッドバーの言つてていることがルナには分からなかつた。
デッドバー達は自分を探していいた……？

一層不可解な顔を浮かべるルナに、デッドバーは意地悪な笑みをつくり、

「いや、お前はまだ知らなくていいんだ。まだ、な」
デッドバーはルナの田の前でしゃがみ込むと、彼女の眼前に手を伸ばした。

(やりれる
……！)

ルナが思ったその時、

「そいつに触んじゃねえよ！」

え？ その声は、ルナとデッドバー、両方が発したものだつた。
白煙から現れた影は、呆気にとられるデッドバーの体を突き飛ばす

「ガツ！」

そしてそれはルナの田の前に立ち止まり、彼女の手を引いた。

「な、あん、た……！」

「早く逃げるぞ！ ルナ！」

獄魔庵は、こんな時でも助けに来てくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5523e/>

閻魔の日記

2010年10月8日13時08分発行